



西松会新聞

The Yushokai Shimbun

第11号

平成30年(2018)3月1日発行



巻頭挨拶 P3

- 緒方 徹 (昭49卒 会長)：「心」という文字が教えてくれること

今シーズンを振り返って P4

- 日置 慶太 (昭56卒 副会長)：入江憲二先輩を偲んで P4
- 赤星 真一 (平4卒 監督)：関東リーグへの挑戦を賭ける舞台 P6
- 池内 久泰 (平6卒)：この冬のできごと P8
- 團 章一郎 (平17卒)：活動停止を経て — OBのサポート強化 — P9

小平G人工芝化への期待 P11

- 福本 浩 (昭52卒)：「期待」から「行動」へ P11
- 吉田 圭吾 (4年 GM)：学生側からの想い P14

今、思うこと P15

- 吉川 健也 (4年 主将)：活動停止を経て P15
- 吉田 圭吾 (4年 GM)：ア式に出会えてよかった P17
- 石川 達也 (4年 庶務)：一橋大学ア式蹴球部での4年間 P18
- 佐々木 錬 (4年 フィジカル)：レギュラーへの思い P19
- 白藤 颯 (4年 新歓・イヤーズブック)：引退して思うこと P20
- 宗 嵩久 (4年 OB)：縦割りの重要性 P21
- 田中 才揮 (4年 イヤーズブック)：ア式としての自分を振り返って P23
- 仁賀 雅之 (4年 メンタル)：このまま終わりたくない P24
- 藤井 拓郎 (4年)：4年間を振り返って P25

- 藤原 慧 (4年 用具・施設)：夢から覚めて P26
- 船越 弘晃 (4年 広報)：臙脂色の記憶 P28
- 本間 拓郎 (4年 イベント・応援)：今の思い P30
- 河野 香苗 (4年 MGR)：今思えば P31
- 山口 千尋 (4年 MGR)：支え P33

平成 30 年度シーズンに向けて P34

- 倉崎 嘉幸 (昭 57 卒)：「理念」と「笑顔」 P34
- 中野 正樹 (3年 新主将)：「技術力」と「組織力」の向上を P36
- 岡谷 真弘 (3年 新 GM)：「熱狂」で「1 部復帰」 P37

自由テーマ P39

- 岩田 淳一 (昭 58 卒)：スペイン マドリッドから P39
- 宮崎 弘喜 (平 6 卒)：小平へ短期留学 P42
- 斎藤 隼人 (平 21 卒)：何年たっても変わらない P45
- 高松 俊 (平 24 卒)：目減りしないメンタル P48
- 宮村 開人 (平 27 卒)：社会人への第 1 歩を踏み出して P50
- 青木 崇 (平 29 卒)：ア式から世界へ P51

私の学生 LIFE・今昔 P53

- 土井 徳秋 (昭 45 卒)：武蔵小金井駅「学生班」 P53
- 杉山 正敏 (昭 49 卒)：ヤドカリ放浪記 P55
- 大島 正 (昭 49 卒)：ヤドカシ追記 ① P57
- 古市 正興 (昭 49 卒)：ヤドカシ追記 ② P57
- 谷口 伸一 (昭 51 卒)：ヤドカシ追記 ③ P58
- 吉岡 基夫 (昭 49 卒)：思い出ボロボロ P59
- 大山 航輝 (平 26 卒)：とにかく明るい貧乏生活 P62
- 関澤 優人 (3年)：マイ食ライフ P64
- 森山 裕理 (2年)：バイトと合コンの日々 P67
- 渡邊 友彬 (2年)：バイト、合コン、そしてサッカー P68
- 達 康大 (1年)：3つのアルバイト P70

編集後記 P72

- 福本 浩 (昭 52 卒 編集長)：西松会新聞は必要か？

「心」という文字が教えてくれること

緒方 徹（昭49卒 西松会会長）



「心」という漢字の由来を知っていますか！？

心臓の形の象形文字から来ているもので、古代中国では心臓の鼓動と精神作用は結びついていると考えられていました。最近、京都の真言宗御室派総本山で、世界遺産の仁和寺の立部祐道ご門跡と話をしました。皆さんもご存知かもしれませんが、仁和寺は皇族の子弟が住職＝門跡となった期間が長く、「御室御所」とも呼ばれて「徒然草」にも度々登場した歴史ある寺院で、遅咲きの桜の名所としても知られています。

立部ご門跡は、「心」という字は四画しかないのに、画の方向がバラバラで不規則にすら感じると言います。私たちの心情が何時も揺れ動いていることを良く表していて、私たちの感情の象形化とも思えるそうです。ところがこの漢字を草書で書くと一筆で書くことができます。それぞれの画が手を取り合っているそうです。いつもは、あちこちを向いている気持ちも、ここぞという時はひとつになれる、一心不乱に事に当たることができるのが、私たちの「心」だということを教えてくれているそうです。

世の中には思うようにならないことが沢山ありますが、損得で考えるとそこから先にはうまく進めなくなります。“損得で考えるのは理想や世間の水準、友人知人と比較しているのではないか。そんな時は『経験を積んでいるのだ』と考えると良い”と話されました。繰り返し経験をして長年培った力は時期が来れば必ず大きな力になると信じておられるそうです。皆さんは昨年大きな試練に会いました。大学の処分が出た時には、「何でこんな事になったのか」、「不当な処分ではないのか」など、様々な気持ちが沸き起こったと思います。しかし、皆さんは話し合いを重ねて反省すべき点を明らかにし、実行にも移しました。そして現役とOB、それに関係者も含め一丸となって事態に対応し、この大きな試練を乗り越えてきたと考えています。

空海・弘法大師は「承和遺誡」という弟子のために残した書物の中で、「一味和合」という言葉を残しています。一つの味をともに味わって和みあい、結束を固めるという意味です。皆さんは仲間が一丸となって対処した今回の貴重な経験をしっかりと糧にして、これからのア式蹴球部の、そして人生の活動に活かしてください。“早く頭角を現すことばかりが大事なのではない。仁和寺の桜は、市中の桜よりも遅く咲くからこそ多くの人が心惹かれて集まってくるのです”と立部ご門跡は話を結ばれました。皆さんのこれからの奮闘を「心」から願い、巻頭の挨拶とします。

今シーズンを振り返って

入江憲二先輩を偲んで

日置 慶太（昭 56 卒 副会長）



2017 年シーズンは、1981 年シーズン以来 36 年ぶりに東京都 1 部に返り咲いた。苦戦も予想された前期リーグをまずの成績で乗り切り、一気に関東リーグへの 42 年ぶりの復帰の期待も心の中にあった。前期リーグ終了後、前代未聞の永久活動停止処分を大学から下され、現役諸君が相当なショックを受けたことは想像に難くない。後期リーグ出場の許可を得るための挽回活動を必死に行い、大学からの活動停止処分を想定よりも早く解除させたことにも、敬意を表すものである。

残念ながら、後期リーグの途中からのリーグ戦参加が認められなかったが、都学連関係者の心の小ささに大変な憤りを感じている。しかしながら、後期リーグを全試合不戦敗しても最下位にならなかった事実により、東京都 1 部リーグで戦う力を十分に有していることを示した。なにより専任のコーチなくして 70 名以上のチームをマネジメントする仕組みを作り上げたことも、一橋大学ア式蹴球部の新しい伝統を作ってくれたものと考えている。ここ数年で作り上げた新しい伝統を、後輩たちは是非ともつなげて行って欲しい。

今回のような出来事は、私の知る限りでは他にふたつある。

ひとつは、数年前にリーグ戦のユニフォームの色が違うとして不戦敗にされた事件。この事件は 1 部復帰の可能性に大きな影響を与えたことから、現在もしっかり守られていると思う。そしてリーグ戦の試合とは関係ないが、もうひとつが一橋大学ア式蹴球部の「旗」の紛失である。この旗を最近見ないので心配な気持ちがあるが、その旗の由来を知ってもらおうべく昭和 55 年卒業の入江憲二先輩（都立戸山高校出身、大学入学までサッカー未経験）のことを記しておきたい。



昭和 52 年 1 年次の夏合宿 新潟・津南にて

サッカー人気の高まりからW杯や五輪に日本代表が出場するのが当然のようになった
現在と違い、同じ東京1部で戦った私たちのチームと現役チームでは大きな差があるだろう。
それでも当時ア式蹴球部のレギュラーとしてリーグ戦に出場するのは容易なことではなかった。
ましてやサッカー初心者でレギュラーとなるのは、よほどの努力が必要だった。彼は人一倍の
努力をして、東京都1部を代表するストッパーとなり、4年生のときはチームの主将を務めた。
当時CFであった私は彼と過ごした3年間、毎日ぶつかり稽古のような日々を過ごした。

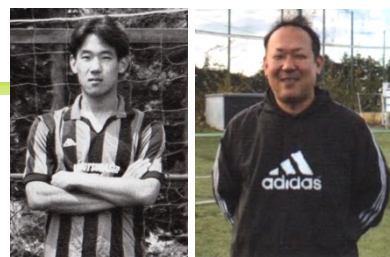
彼のお父上は、当時関東リーグ1位の法政大学の監督をしておられた。
そのおかげで法政大学とは何度か試合をさせていただいた。法大も1軍を出してくれて、関東
リーグのレベルの高さを肌で感じ、入江先輩とはお互いにそのレベルを目指して切磋琢磨した。
結果としては5年振りの関東リーグ復帰は叶わず、今でも残念な思いで一杯である。そして彼は
三菱商事に就職し、バリバリの商社マンとして国内外で活躍したが、イギリスで病に倒れ帰国し
28歳で生涯を終えた。

葬儀に参列したが、法大出身の当時の日本代表選手がたくさん弔問に訪れていた。
我々も悲しかったが、ご両親の悲しみは当然ながらその比ではなかったと思う。そのご両親から
西松会に寄付金50万円が届いた。関係の皆さんと相談をして何か形に残そうということになり
西松会公式の行事等の時に使う「一橋大学ア式蹴球部 贈 入江憲二」と書き入れた、赤い立派な
「旗」を数十万円かけて作成した。その旗が出来上がったときに、入江先輩と同期の吉田先輩と
目黒駅で待ち合わせして、大岡山の入江家に一緒に伺い、ご両親にお見せする約束をしていた。
すると目黒駅で突然に大雪が振り出し、いきなり東急線がストップしてタクシーにも乗れず、
結局訪問することができなかった。おそらくご両親は楽しみにしていらしたろうし、食事の用意
もしてくださっていたと思うが、どうしようもなかった。重い旗を手袋もしていない手で、雪に
何度も足をとられながら歩いて家まで帰ったことが、先日来の雪で思い出された。結局、入江家
の訪問はその後もできず、ご両親には旗を見せることができなかった。未だに忘れられない私の
の心の中の大きなトラウマのひとつである。天候のことではあるが、その後の時間がなかった
わけではなく、入江先輩とご両親には本当に申し訳ないことをしたと後悔することしきりである。
お許しいただきたいと思う。

入江先輩とご両親の思いのこもったその旗を、部室に置いておいたら紛失（盗難？）したという
事件が発生し、当時の現役の諸君は深く反省し、現役からのお金も使った形で、改めて同じ形の
旗を作成した。その旗が、現在あまり活用されていないようなので、是非とも使って欲しいもの
である。ほとんどいないかもしれないが、サッカー未経験で大学の体育会サッカー部に入部し、
努力で東京都1部リーグのレギュラーをつかんだ先輩がいたことを知ってもらいたい、そして
入江憲二（我々はイリケンと呼んでいた）の名前を思い出してもらいたいと思い、拙い文章を
書かせてもらった。

関東リーグへの挑戦を賭ける舞台

赤星 真一（平4卒 監督）



■異例なシーズンへの思い

『3勝3分3敗、18得点16失点、勝点12、
36年ぶりの東京都1部の舞台に残した価値ある足跡。空白のままとなった残りの9試合と
その結末を見ることは叶わなかったけれど、先輩たちと共に築き上げてきたチームが
確かに到達した地点。そこは、我々の長い歴史の中でも類を見ない状況を乗り越え、
後輩たちが関東昇格という大きな目標に挑むうえでの重要なメルクマールとして残された。』

これは、例年4年生へ後輩たちから贈られるアルバムに私が寄せた文章の前半部分です。
昨年のこの紙面にも期待と信頼を込めて記した通り、現役チームは、東京都1部リーグに覚悟を
持って挑み、強豪チームを相手に臆することなく戦い、確かなインパクトを残してくれました。
そして、不完全ながらも到達したこのレベルは、今後のチームにとって大きな意味を持つ基準に
なったと考えています。以下は、続く後半部分です。

『不条理とも言うべき運命で空いた穴を埋める術は見出せないとしても、
4年間での得難い経験や仲間の存在が色褪せない限り、決して完全には消えないであろう傷跡に
感じられることも次第に変わってくるのかも知れない。（中略）それぞれの代の様々なシーズン、
一人ひとりの個性や成長を見てきた中で、抱く思いに優劣など無いけれど、今年のチームと
君たちの代には敢えて格別な敬意を表したいと思う。一橋大学ア式蹴球部の誇りを胸に刻みつつ。』

最後のシーズンを極めて異例な形で過ごすことを強いられた4年生にとって、
「この経験が何かに繋がるはず」などといった慰めの類いは、彼らが欲するものでは
ないでしょう。ただ、困難に直面するなかでの彼らの姿を通して、私は一橋大学ア式蹴球部の
“誇り”を感じさせられたと、改めてここに記しておきたいと思います。



■関東リーグへの挑戦を賭ける舞台

大学からの無期限活動停止処分は現役チームの真摯な取り組みもあって2か月で解除されたものの、リーグ戦の秋期日程開始には間に合わず、残り全9試合が不戦試合（不戦敗）となりました。経過の詳述は控えますが、我々の処分解除前の対戦チーム（不戦勝）と、その後の対戦チーム（結果次第）との間で生じる不公平が避けられないことが大きな理由でした。我々からすれば、大学からの処分が解除されればリーグ戦復帰に支障がない訳ですが、他チームからすれば何ら謂れのない不公平を強いられることになるという構図です。言い換えれば、可能な限り参加機会を守るべきという価値観と、可能な限り公平性を守るべきという価値観、どちらかを優先させざるを得ない問題だったということです。

参加機会を奪われることの重大さは、真剣にスポーツに取り組む全ての人が、自分のことでなくとも痛いほどに感じられることだと思います。それでもなお、勝負の基盤をなす公平性を守るべきという価値観を優先させるということは、その結果に賭けるものの大きさの現れと言えるのではないのでしょうか。

東京都1部リーグは、10チームが関東リーグへの挑戦権を賭けて上位（前年の関東リーグとの入替え状況により2～4チーム）を争う舞台です。続く関東大学サッカー大会では、都県リーグを勝ち抜いたチームを合わせた8チームで、2つの関東リーグ昇格枠を争うことになります。たとえ強豪チームであっても、決して簡単に関東リーグへの切符を掴めるものではありません。即ち東京都1部リーグは“関東リーグへの挑戦を賭ける舞台”であり、我々だけではなく全てのチームが、そのチャレンジに大きな意義を認めていることは間違いないでしょう。こうした意味において、お互いはライバルであると同時に、あるいはライバルという関係をも超えて、価値観と志を同じくするチーム同士と言えるのだと思います。

36年ぶりの東京都1部で堂々と戦えるに至った過程において、現役チームは間違いなく力をつけてきたけれども、自分たち自身に目を向けることに比重がかかり過ぎた成長だったのかもしれません。そうだとすれば、次シーズンでの「東京都1部復帰」も、その延長線上にある「関東リーグへの挑戦」も、これまでとは異なる視点を内包した目標でなければならないのかもしれません。私自身も大きく心を揺さぶられる1年を経た今、“関東リーグへの挑戦を賭ける舞台”に纏わる価値観を見つめ直すことが、より逞しいチームとなって残された“道標”を超えていくことに繋がるのではないかと考えています。

この冬のできごと

池内 久泰（平6卒）



現在私は三重県に在住、社会人になってからほとんど関東にいなかったため、地元の高校サッカー予選ニュースや中継とは縁が無くほとんど忘れていた。昨年12月、実家に帰ったとき、母校が高校選手権神奈川県予選準決勝を戦っているTV中継を、たまたま見た。試合は完全に母校のペースで、中盤にパス出しの巧みな選手がいて、トップの足が早くドリブルのうまい選手と体の強い選手が相手をかき回して、5-1で快勝した。ところが奇妙なことに応援席は閑散として、学校として応援している様子ではない。一部の同級生と父兄のみが駆けつけている感じを受ける。またTVの解説では指揮を取っているのは監督代行で、1昨年に復帰した監督が1-2年生を指導しているため1-2年生の部員は応援に来ていないとのことだった。気になったので後で調べてみると、2015年にL監督が就任し、1-2年生は監督が集めた選手で神奈川県1部リーグを戦い、3年生は全員2軍に落とされ3部リーグを戦っていたとのこと。今回選手権予選を戦った選手はその「2軍」の3年生と、3人の2年生だったとのことであった。

現在の母校のレベルとは雲泥の差で恥ずかしい限りだが、私は30年前を思い出していた。私たちが高校3年になる年に突然このL監督が就任。1年生に当時の全国レベルの選手を集めて私たちはAチームとBチームに分けられ、ほとんどの3年生がBチームとなり選手権予選に出ることはなかった。L監督はその後10年ほど母校の監督を務めた後いったん離れて、また戻ってきたとのことである。今回、私は何としても彼ら「2軍」に勝ってほしかった。翌週の神奈川県予選決勝の相手は優勝候補筆頭で、0-0で決着つかずPK戦にもつれこんだ末、母校の「2軍」は神奈川を制覇した。この選手たちは2軍に落とされ、わずかなグラウンドのスペースしか与えられなくても日々練習し、監督と学校に訴えて選手権予選出場し、予選を突破した。逆境に立ち向かって結果を出した彼らを称えたい。

現在、一橋のサッカーも逆境にあるかもしれない。納得のいかないこともあったかも知れない。でも、腐らずに頑張っている現役のみんなを応援しています。自分たちを磨いて、また1部リーグに戻ることを祈っています。



活動停止を経て — OB のサポート強化 —

團 章一郎（平 17 卒）



2 年前に西松会の幹事を拝命したことを機に、現役の試合観戦、幹事会への出席（観戦・出席率は 3 割弱と芳しくないが・・・）をさせて頂いている。個々の選手の止める・蹴る・運ぶという基礎技術に裏打ちされた攻撃的な試合展開は OB という立場を措いても見応えのあるレベルであり、前季の 1 部昇格、今季の 1 部所属チームとの拮抗した試合内容と、更なる躍進を期待していた。しかし、前期終了直後の 7 月初旬に大学から活動停止処分を下され、後期は全試合不戦敗、2 部降格となった。グラウンド転賃の顛末については、福本編集長の寄稿にて詳らかにされており、また、活動停止処分にかかる大学判断に対しては、陸上部 OB 後藤氏の如水会々報寄稿内容で深淵な批評がなされているため、西松会幹事という立場から、当該問題を省みる。

まずは、何より、当事者として、一番厳しい状況に置かれた現役の部員・マネージャーが活動停止中も、一切、卑屈になったり、自棄になったりすることなく、やるべきことをきちんと見定め、真摯に対応していた点に感銘を受けた。活動停止直後の幹事会においては、最高学年の 4 年生の部員・マネージャーをはじめ相当な焦燥感（理解・納得できない感じ）が滲み出ていたが西松会幹事の後押しもあり、その後は、チームをまとめあげ、迅速且つ誠実な対応を徹底して、緒方会長の手記にある「懈怠此丘不期明日」という言葉を胸に（実際にしていたか不明だが）、社会貢献活動等に尽力をしていた現役の部員・マネージャーの姿勢には、本当に心が打たれた。

一方で、活動停止処分がなされてからの、西松会および OB による非常に迅速且つ力強い対応（活動停止直後からの緊急対策チームの立ち上げ、嘆願書等の作成、主要教授へのコンタクト等）を目の当たりにし、OB の底力を再認識した（働きながら略 24 時間体制で諸々書面の作成等をしている後輩、休日に現役と対策検討会議に勤しむ監督等々正に八面六臂の活躍をされていた）。上記の現役および OB による尽力により、夏休み中の活動停止解除という大学の異例の措置を引き出すことができ、結果的に出場は叶わなかったが、紙一重のタイミングまで迫ることとなった。

本件を通じて、有事の際の OB の強力な支援が再確認できたことは良かったが、経緯を辿ると、より大事な日常的・恒常的なサポート、また、その礎となる現役と OB の緊密な関係の不足を感じた。私自身、恥ずべきながら、2017 年 4 月頃から大学が現役の選手・マネージャーに聴取を行っていた（警告が発信されていた）にもかかわらず、7 月に公式サイト上での現役による活動停止の報告を同期から指摘されるまで、西松会幹事であるにも関わらず、本件をまったく感知できていなかった。

現役は、大学側の窓口である学生支援課の対応から、活動停止という重い処分を想定せずに大学側と対峙し、定例の西松会での報告も非常に簡素な内容になり、他 OB は問題を認識できていなかった。しかし、OB の支援開始後、2 ヶ月弱で活動再開に漕ぎ着けられたことを考えると、現役の西松会への報告がもう少し詳細・具体的であれば、また報告を受ける OB が、もう少し大学・現役の実態に近く、高い感度を持っていれば、最終決定前に相応の手当てができたのではないかと、大変悔しく思う次第である。このような現役と OB の「隔たり」は、西松会幹事会の出席状況（社会人 20 年前後の OB が最も若手、出席者が一部役職者に固定）および OB 総会への出席状況（社会人 5 年目～20 年目の OB 参加者ゼロ）から、その要因の一端を OB が担っていると思われる。そこで、仕事、プライベート等、なかなか時間が割けないのは承知の上であり自分も大きな口を叩いたものではないが、先ずは少しでも多くの OB の方に現役の試合に加え、西松会、OB 総会等に参加をして頂きたいと考える次第である。

西松会でも、本件を受けて、現役からの定例聴取の深掘などの予防策を検討・実施しているが、4 年間の集大成の場であるリーグ戦出場の機会を失った 4 年生をはじめ、現役の選手・マネージャーの受けた本件による影響を慮ると、対処療法的な対策に加えて、厚く・強くなっている現役を支えるに相応しい、より力強いサポートができる体制としていくための出発点と位置付けた方が良く考える。実現のための具体的な打ち手は考えられていないが、上記の通り OB の方の参加の増加、OB と現役のコミュニケーションの密度・頻度の向上が不可欠と考える。昨夏、あれだけの熱情を見せた OB、西松会だからこそ、本件を経て、更なる強化が可能と確信している。



小平G人工芝化への期待



「期待」から「行動」へ

福本 浩（昭52卒 編集長）



3年後、一橋大学ア式蹴球部は、創部100周年を迎えます。

大正、昭和、平成・・・何千名もの部員が小平グラウンドで汗と涙を流してきました。誰が現在のような、母校のグラウンドでリーグ戦を戦えないという悲しい状況を予想できたでしょうか。日常の練習ですら、多くの時間を府中市にある人工芝グラウンドを借りて行っている始末です。西松会新聞の発刊以来、さまざまな世代のOB、そして現役諸君が「人工芝化への期待」を綴ってくれました。しかし「期待」だけでは、もはや先に進めません。小平グラウンド人工芝化プロジェクトを「創部100周年記念事業」と定め、3年後に実現するための具体的な「行動」をスタートさせる時期ではないでしょうか。昨年末、西松会新聞 Website にも投稿しましたが、もう一度この紙面を借りて、私なりの提案を記したいと思います。

1) 小平グラウンドの社会的有効活用

昨夏の「活動停止処分」はショッキングな出来事ではありましたが、サッカー部の活動というものは、それを取り巻く社会を抜きにしては存在できないということを、改めて知る機会にもなりました。本紙に寄稿した首相の主将の吉川くんは、今の思いをこう綴っています。

サッカーだけをしていればいいという価値観を捨て、サッカー部の活動が
多くの人を巻き込み、共感してもらえるような、魅力あるチームにしなければならない。

小平グラウンド人工芝化プロジェクトも、また然りです。大学や地域社会を巻き込まない限り、実現は難しいと考えます。確かに無許可の転貸行為は論外ですが、だからと言って部外者に大学のグラウンドを貸すこと自体が悪いとは思いません。むしろ積極的にやって小平グラウンドの社会的な存在価値を高めるべきではないでしょうか。そうしないと誰も人工芝化プロジェクトに関心を持たないし、協力しようとも思わないでしょう。

参考にしたいのが、4年前の陸上競技部の事例です。

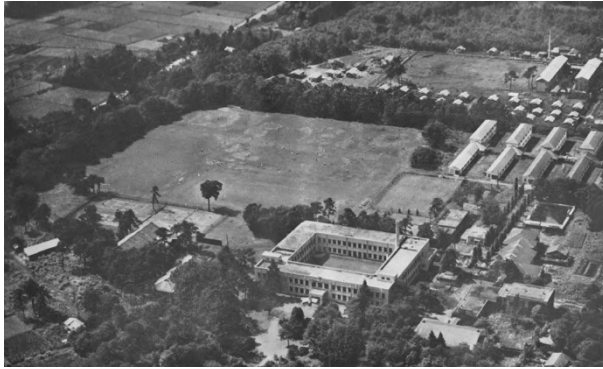
一橋大学陸上競技部は、OB による「一橋大学基金」への寄付金を基に、「土のグラウンド」から「全天候型タータングラウンド」に改修しました。そして部の強化を目的とし、合同練習の形で「日本郵政女子陸上部」に利用してもらうことにしたのです。その結果、一橋は 100 m の記録更新が相次ぎ、日本郵政は創部 3 年目にして全日本実業団女子駅伝で初優勝するという、素晴らしい相乗効果をもたらしました。日本郵政の優勝祝賀会には一橋の OB も招待され、“悲願の初優勝は一橋グラウンドでのスピード練習のおかげ”と、大変感謝されたそうです。

平成8年（1996）に小平分校での教養課程が廃止されて、もう20年以上になります。一橋学園駅周辺の商店街も、かつての活気を失って久しい状態で、小平にグラウンドを持つサッカー部でさえ人工芝で練習できないために、来る機会が激減しています。もう一度、我々OBが思い出をたくさん残している小平に、多くの人が集まるようにできないものか・・・地元の少年サッカークラブに小平グラウンドを使ってもらえれば、その一助になり得ます。もちろん現役部員が立ち会う必要がありますが、もっと積極的に、現役だけでなくOBも少年少女たちのサッカー指導に参加すれば、地域社会への貢献につながると思います。さらに小平キャンパスには、たくさんの外国籍の学生が住んでいます。彼らと協力して、世界各国の物産や料理を売るバザールを開いてはどうでしょう。もちろん近隣の商店街の方々にも参加してもらいます。地元の人やOBも加わって、国際交流ミニサッカー大会を開催するのも面白いと思います。小平に衆目が集まるようになることは、「小平G人工芝化プロジェクト」を推進することの一助にもなるはずです。地域社会の人も利用できるグラウンドとなれば、広く寄付を募ることもできます。小平市や大学、ひいては日本サッカー協会の協力を仰ぐこともできるのではないかと夢想しています。

2) 人工芝募金のスタート

先日配布された如水会報には、フィールドホッケー部が公益社団法人「一橋後援会」に多額の寄付をしたと記載されています。26名で総額850万円！国立西キャンパスにあるグラウンドの人工芝化のためです。サッカー部も負けていられないという気になりました。30名ぐらいで1000万円を集めることも可能なのです。まず西松会が人工芝化の資金をどれだけ集められるかその実績を作らないことには何も始まりません。他団体に協力を仰ぐ説得力もありません。試算では、サッカー場を人工芝化するには1億円かかるということです。それを聞いて無理だと思う前に、まずトライしてみませんか？この際、金額も具体的に提案すると1口10万円から。創部100周年の記念事業となれば協力するOBも多いはずです。私は言い出しっぺなので5口50万円出します（あ、言ってしまった）。寄付金の受け入れ先は、陸上部が「一橋大学基金」、フィールドホッケー部が「一橋大学後援会」ということですが、サッカー部はどうすべきか、要検討です。西松会のOBには実業界の各方面で活躍されている方がたくさんいらっしゃるからきっといい知恵が生まれるはずです。

私の夢は、関東リーグ1部に所属する一橋大学ア式蹴球部が、小平の人工芝グラウンドで戦い、勝利すること。そして試合後に、「藤乃木」でOBや現役たちとトンカツを肴に生ビールを飲み、勝利の余韻に浸ること。楽しいだろうなあ。



● 学生側からの想い

吉田 圭吾 （4年 GM）



小平グラウンドの人工芝化プロジェクトに寄せる期待は大きいものがあります。私自身は土の小平グラウンドに愛着があり、土であることにそこまで大きな抵抗を感じない数少ない部員の一人であるとも思います。しかし、1年間 GM を務める中で土の小平グラウンドに悩まされることは多くありました。

まず、土のグラウンドにとって雨は天敵です。

特に小平グラウンドは排水機能が衰えており、水がグラウンドに溜まってしまうため、雨天では練習、試合を行うことができません。1ヶ月近く連続で小平グラウンドにおける練習試合が中止になったこともありました。また小平グラウンドが使用不可となった場合、他の部活との兼ね合いで体育館などの代替施設が使用できる保証もありません。中には体育館2階の狭いスペースしか使えないような日もありました。部員数の増加に伴い、試合の本数を確保するためには、小平グラウンドの使用は不可欠です。グラウンドの排水機能を高めるため、部員の協力のもと簡易的な土木工事も施しましたが、効果は薄く、根本的な解決にはつながりませんでした。部員自身が今ある環境に感謝し、環境を自らの手で改善していく姿勢はもちろん大切ですが、そろそろ限界が近づいているのではないのでしょうか。

また1部所属の大学の中で、土のグラウンドを使用していたのは一橋だけでした。

これは大きなハンデであると感じています。土のグラウンドでは、現代サッカーの中で大切なポゼッションなどの技術向上を目的とした練習を満足に行うことはできず、練習メニューも限定されることが多かったです。他大学とのハンデをいかに覆していくか、土のグラウンドで出来ることを考えて実行していく、その過程は私にとってはとてもチャレンジングで魅力的ではありましたが、サッカーの戦術が日々進化していく中で一橋だけが時代から取り残されてしまう危険性もあると感じました。これは「活動停止」期間中に東京大学の練習に参加させてもらい、実感したことでもあります。危機はすぐそこに迫っている、といってもいいかもしれません。

人工芝化の必要性を誰よりも感じたのは、間違いなく東京都1部の舞台を経験した私です。そのような私だからこそ、人工芝化は関東昇格に向けて必要不可欠なプロセスの1つであると断言したいと思います。ぜひ現役、OB 一体となって実現させましょう。

そして、皆で関東昇格しましょう！

活動停止を経て

吉川 健也（4年 主将）



主将を務めさせていただきました吉川です。

2017年は特に例年以上にOBの皆様にお世話になりました。

辛い期間に頂いたサポートやメッセージは、もう一度部の為に闘うという気持ちを奮い立たせてくれるものとなりました。本当にありがとうございました。活動停止を経て思ったことについて書かせていただきます。

部の歴史上、前代未聞の「無期限活動停止」という処分を受けた訳ですが、正直当初は、何でそこまで重いものなのか理解もできず、ただサッカーという当たり前の権利を奪われたことに呆然としていました。しかし、色んな方の協力を得て活動停止を解除出来ないか模索したり、半ば強制的にボランティア活動や反省行動をさせられているうちに、なんとなく自分が狭い世界観を持っていたということに気づかされました。サッカーだけをしてれば良いという価値観と、1部昇格を果たし関東昇格を目指すことに、ある種の優越感のようなものがあったのだと思います。厳しい練習をこなしてサッカーが上手くなって、その結果1部昇格をして最高の思いをして、関東を目指す。大袈裟ですが、ア式が何かの物語の中心にあるような。また同時に、ア式が本当に多くの方々に応援されていることも知りました。OB 保護者の方々は勿論、練習参加させてくれた他大学、ア式のアカウントにコメントを寄せてくれた一般の大学サッカーファン、一橋の他の部活動のOBにご協力頂いたこともありました。

一方で。今でも、もう少しア式の活動に共感してくれている人が多かったら、と思うこともあります。他大学が、関東昇格争いに一橋を欠くことは出来ないと思えるほどにア式が魅力的なチームであればリーグ戦に参加できたであろうし、大学からも活動を理解してもらえていればこのような事態も無かったでしょう（あまり現実的ではないですが）。ただ、今後ア式に対する共感者を増やすことは1部復帰、関東昇格に必要です。その中でア式がどのように人を巻き込んでいくかというあり方については考えていかなければならないでしょう。最終的にこの問題はア式はどういう団体であり、どんな価値を生み出したいのかという問いに行き着くと思うのですが、この点については実際に活動する現役が考えて答えを出すべきでしょう。ただ、僕がア式に入部した時はサッカーをすることしか考えていませんでしたし、そんなことを考えて入部する人はいないでしょう。今回の件を残念なものだったで終わらせないために、現役はサッカーだけに集中すれば良いという価値観を部として改め、OBが彼らに対してア式の価値を問うような姿勢も持つべきではないでしょうか。自分は活動停止、2部降格の年の主将という少し不名誉な役ですが、その点についての視点を失わないように努めていきたいと思います。

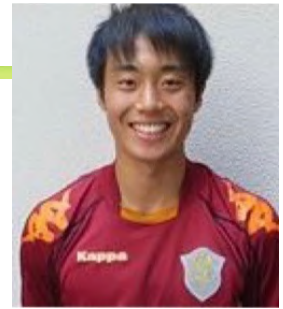
最後に、色々ありましたが、やっぱりサッカー人生の終わりに一橋大学ア式蹴球部を選べたことを誇りに思います。OB としてですが、今後どうぞよろしくお願い致します。4年間ありがとうございました。

＊2017. 11. 5 東京トーナメント第1回戦 vs 東京理科大学＊



🏆 ア式に出会えてよかった

吉田 圭吾 (4年 GM)



非常に濃い4年間でした。

何もできずに、ただただチームが苦しんでいる姿を眺めていることしかできなかった1年目。チームの一体感に包まれながらプレーすることの幸せを知った2年目。ついに成功を掴んだ3年目。そして、人生最大の挫折を味わった4年目。4年間という限られた大学サッカー人生の中で、これほどまでに濃い経験を重ねることができたことは、私の一生の財産です。すべて自身の成長に繋がったと感じます。特にGMという役職を経験させてもらえたことは自身の人生の転機になったと思います。内向的でとにかく自分という人間に自信のなかった私に、このような成長の機会を与えてくれたア式蹴球部の懐の深さに改めて感謝したいと思います。ア式蹴球部のような自由な組織でなければ、私のような人間は一步踏み出すこともできていなかったと思います。ア式蹴球部に出会えて本当によかったです。

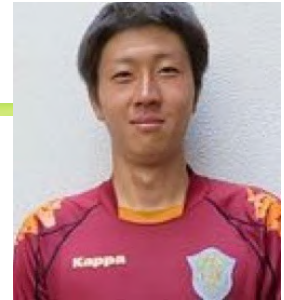
ア式蹴球部における一番の学びは「自分を信じることの大切さ」です。

自分の可能性を信じること、そこには大きな苦痛を伴いますが、この姿勢を貫くことで不可能も可能になるのではないかと考えられるようになりました。元来ネガティブな私が、このようなポジティブな考え方を持つことができるようになったのも、ア式蹴球部における成功体験のおかげです。この考え方を必ず次のステージでも生かしたいと思います。自身の成長や組織の中での役回りなどの難しい話は抜きにしても、素晴らしい4年間でした。仲間と純粋な気持ちでボールを追いかけることのできた日々は、かけがえのないものでした。大好きな仲間と顔を合わせる、サッカーをする、ビデオを見る、授業を受ける、ご飯を食べに行く、家に帰る、たわいもない日常が、とにかく幸せだったと感じます。そのような日々を与えてくれたア式蹴球部が私は大好きです。今度は後輩たちが素晴らしい日々をア式蹴球部で過ごせるよう1人のOBとして後輩を支えていきたいと思っています。4年間本当にありがとうございました。



🏆 一橋大学ア式蹴球部での4年間

石川 達也 (4年 庶務)



OB・OGの皆様、普段より一橋大学ア式蹴球部への御支援を頂き、誠にありがとうございます。また今年1年間苦しい経験をしましたが、これを機に、より強い一体感を持ったチームで来年度以降、後輩の皆が東京都の舞台で闘ってくれると信じています。OB・OGの皆様には今後とも変わらぬ御支援を賜われたら幸いです。

今年は一橋大学ア式蹴球部にとって苦難の1年間でありました。

個人としては高校3年生の受験の期間を除けば、中学1年生から部活動として始めたサッカー人生の中で、最もサッカーをしない1年間でした。しかし、この経験を経て、いかに自分自身がサッカーが好きであるかを感じました。また大学の部活動という環境に身を置いて、普段からサッカーをしていると気付かないことでしたが、サッカーを全力でやる環境があるということが、どれほどありがたく、恵まれた環境であったかということを強く実感しました。現在は出身高校の練習に時々参加する程度の頻度でしかサッカーをする機会はありませんが、社会人となっても何らかの形でサッカーを続けたいと思っています。

一橋大学ア式蹴球部での4年間は、とても濃い4年間であったと感じています。

私は大学サッカー部に入るにあたって、サッカーが上手になりたい、レギュラーとして試合に出たいという思いで入部しました。大学2年生の際に右膝に大怪我を負ってしまい、その時期にはサッカーをやめようかと思ったことも幾度となくありました。怪我をする以前は、チームより個人の結果が大事だという考えがありました。しかし大怪我をして、練習中の手伝いや試合の応援等に精力的に取り組むことで、チームの結果に対するこだわりやチームに貢献しているということに対する喜びを見出せるようになりました。これは私自身の中では、とても大きな成長であったと考えており、こうした意識・考えを忘れずに今後社会人として頑張っていきたいと考えています。今後ともよろしくお願い致します。



🏆 レギュラーへの思い

佐々木 練 （4年 フィジカル）



4年間を振り返ると、本当に様々なことがあり、貴重な経験ばかりだなと思いますが、その中で、ひとつの大きな後悔として、結局リーグ戦のピッチに立つことが出来なかったことがあるので、そのことについて思うところを書きます。

チームは、まさに今強くなりつつあります。

3年前は2部で降格争いをしていましたが、去年は1部で（前期の戦績のみ見れば）良い戦いができました。チームが強くなっている要因のひとつに、入部者の人数、そして質の向上が間違いなくあります。僕らが入部したときから部員は毎年増え続け、また全国大会経験者やサッカー強豪校出身など優秀な人材もコンスタントに集まるようになりました。チームが強くなり、そこに惹かれる人が増え、またチームが強くなる、そんな循環の中に今いると思います。

そのようなアシキにおいて、当たり前ですが、試合にからめる人間とからめない人間がいます。そして、その多くは入部してからほとんど変わりません。うまい人は、1年生の夏くらいには段々とリーグ戦に出始め、逆に1-2年生でリーグ戦に出られなかった人で、3-4年から活躍できた人は、あまり多くいません。大学までの長いサッカー人生で培われた差を埋めることは難しいです。つまり、半分くらいの部員にとってトップチームに上がることは、現実的な目標ではないのです。

また、身も蓋もない言い方をしてしまえば、アシキはレギュラーになる必要のない場所です。ピッチ外での活躍の場はたくさん用意されているし、将来プロになるために、大学の4年間でサッカー選手として何らかの結果を残さないといけないと考えている人もほぼいないでしょう。そんな中で自分が4年間ずっとレギュラーになれると信じ、努力してきたかという、そうではないですし、それが最善だとも思いません。結局、敵は自分なので、目標を高く掲げすぎると、極端に自分を卑下して逆効果になることもあるかもしれません。ですが、その様な境遇におかれた人間がそれでもなお本気で上を目指すこと、それ自体に大きな意味があると思います。多くの人を勇気づけると思います。泥臭く果敢な姿勢が人の心を動かします。少なくとも僕はそう思うので、もしサッカーが上手くいなくて辛いときあれば、そこで頑張ることで勇気をもらう人がいたなと、もうひと頑張りする励みに思い出してくれたらこんなに嬉しいことはありません。最後に、現役部員の益々の発展を祈願して、終わりたいと思います。

引退して思うこと

白藤 颯（4年 新歓・イヤブック）



現役時代は新歓ユニットとイヤブック・ユニットをやらせていただきました。ここではア式のサッカー面とサッカー外について引退してから思ったことを書かせていただきます。

まず、サッカー面について。

ア式では勝つためにチームとして球際・切り替え・運動量ということを大事にしていましたが、それは間違っていなかったという確信を引退してから得ました。東京都トーナメントの武蔵との試合で負け、引退してからあまり行くことができていませんが、アストラという社会人チームでサッカーをやらせてもらっています。アストラは社会人東京都1部のチームで、僕の母校である暁星高校のOBが中心となっていますが、暁星高校出身以外の方もたくさんいらっしゃいます。筑波大学出身であったり、市立船橋高校出身であったりと、サッカーエリートの人が多いです。そういう人たちとサッカーをしていると技術の差を痛感します。しかし、その人たちに勝てる要素がもしあるとすれば、球際・切り替え・運動量です。ア式がリーグ戦で戦う相手は基本的にア式よりも技術は勝っています。ポゼッションを大事にするとかは勿論大事なことです。球際・切り替え・運動量といった当たり前のことを大事にしていたサッカーは、間違っただけで、今後のア式でも大事にしていってほしいと思います。

サッカー外について。

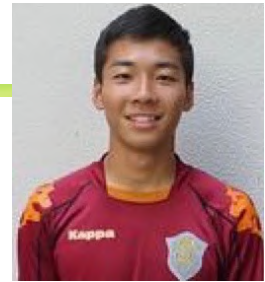
上記で述べていますが、ア式では新歓ユニットとイヤブック・ユニットで仕事をやらせていただきました。誰だってそうかもしれませんが、僕は自分がしたいこと以外のことをするのが嫌いで、ユニットの仕事をするのもあまり好きではありませんでした。しかし今となっては、ユニットの仕事にもっと積極的に取り組んでおけばよかったと思っています。ア式のユニットの仕事はとても貴重な経験で、普通の学生が簡単に経験することができることではないということを引退してから感じています。

最後に。

僕の大学サッカー生活を支えてくれた両親、同期、先輩、後輩、OBの方々等に心より感謝申し上げます。

縦割りの重要性

宗 嵩久（4年 OB）



引退して早くも2ヶ月半が過ぎた。「今思うこと」というテーマで自由に、と言われたので、最近感じたことについて書かせていただく。

4年間の振り返りでも、サッカー人生の総括でもない。正真正銘、「今」思うことである。

学年に関係なく縦割りの関わりがあることは、ア式の大きな魅力の1つと言っていいだろう。食事LINEやユニットは与えられるものではあるが、他学年との交流の面でも、非常に価値が高いシステムだ。定期的に行われる食事会などのイベントも仲良くなるチャンスである。FCなんちゃらを始め（最近はめっきり聞かなくなっているが）、帰路が同じであったり、好みと同じであったり、とにかく何かしらの理由をつけて縦割りのグループがしばしば発生する（ある時はさせようとする）文化もとても良いと思う。しかし、こうした学年をまたいだ交流が自分が1年の時に比べて、感覚ベースではあるが、減ってきているように思う。サッカーとは全く関係のない、ただの遊びの関わりというのも、お互いのことを知るのに大切である。というより、信頼関係の構築とか、ピッチ外の関係性とか、そういった堅苦しいことは置いておいて、単純に、週5も共に過ごしているやつらと遊びに行き、つまらないわけがない、と自分は思ってしまう。

かくいう自分も、部のイベント全てに積極的であったかと言われたら、微妙ではあるが、それでも先輩方には4年間でたくさん遊びに連れてってもらった。帰路が同じ先輩には、部活の後にごはんに連れてってもらった回数は計り知れない。遊びでいえば、交通費だけでプールに行かせてもらったり、ゴールの予感が全くしない合コンに呼んでももらったり、期末テストや授業の情報を提供しただけで神戸牛をご馳走になったり、遠方の1リーグの後にその足で急遽小田原に連行されたり・・・どれも自分にとって格別の忘れられない思い出である。

学年が上がるにつれ、自分も連れていく立場として、そういった縦割りの遊びでは、後輩を巻き込むように意識し、特にオフの期間には後輩を誘って遊びにいった。後輩を巻き込む意識なんていうと、また義務感みたいなニュアンスが含まれて嫌なのだが、要は、ただ単純に遊びに行きたいだけで、そういう時に同期だけではなく下の代にも声をかけるようにした程度である。その中で縦割りで遊びに行くことの楽しさを、少しでも伝えることができていたら嬉しく思う。この手のイベントが減っていることは、先輩と後輩のどちらかが悪いという話ではない。先輩側は、気後れするなら同期数人で後輩を連れていってもいいと思う。後輩側も親しい先輩、もしくは親しくなりたい先輩に行きたい場所や遊びたいことを深く考えずに思いつきで投げてみても全く問題ないだろう。先輩は企画力・資金力の両面で応えてくれるはずである。

同期のつながりというのも確かに大事だ。

4年間を共に過ごし、最後の1年は協力してチームを牽引するメンバーである。

同期と過ごす時間が多く、仲良くなりやすいのは自然なことだ。

しかし、せっかく縁あって代が被った先輩や後輩との関わりが希薄になっていってしまうのは、とても寂しいことであるように感じる。年々部員数が増え、規模が大きくなっていく中で、縦割りの交流は、ア式の良き文化として残ってほしいと心から願っている。

＊2017.11.5 東京トーナメント第1回戦 vs 東京理科大学＊



🏆 ア式としての自分を振り返って

田中 才揮 （4年 イヤーブック）



昨年の引退で、15年間続けてきたサッカー人生に一区切りをつけることができました。思えば大した活躍もできず、最後まで大事なところでシュートを外す情けないフォワードでしたが、大学サッカーという舞台でこれまでにない経験をさせて貰えたことを本当に感謝しています。

これまでの4年間、私は「体育会サッカー部」の人間として様々な場面で行動してきました。アルバイト先では疲れ切った顔で出勤し、すぐに帰宅したがる付き合いの良くない人間として評価されていたことを最近知りました。このように私の行動やパーソナリティにア式蹴球部は大きな影響を及ぼしていたと今更ながら強く感じます。

引退してからはそういった肩書がなくなり、個人として周囲に評価される機会が増えたように思います。具体的に言うと、塾講師のアルバイト先では「体育会サッカー部の稀に勤務する田中」ではなく、「17連勤の田中」や「ほぼ社員の田中」として見られるようになりました。しかし、その自分を構成しているのは間違いなく4年間の経験であり、私の人格の一部としてア式の持つ価値観や行動様式は存在し続けています。

一方で4年間を好きなこと、サッカーだけに費やしてきたことの限界も外の世界に出て痛感しました。よく指摘されることですが、現在のア式蹴球部の内部関係は非常に密であり、プライベートなど存在しないに等しいとまで言われる状態ですが、同時に閉鎖的であるとも言えます。私自身いわゆる就職浪人という立場にありますが、他大学の様々なことに取り組んでいる学生と話すと、自分の視野の狭さや知識の浅さを痛感させられ、サッカーに取り組む時間の比重が高まる弊害を感じます。

しかし、それでも私は、ア式での時間を他に代えがたいものだと思います。価値観やチームの哲学、受け継がれる熱意や歴史、非サッカーエリートが高いレベルに挑戦するという姿勢が、この部の魅力です。そんなチームの一員であったことを誇りに思い、そのような素晴らしい部で挑戦し続けられる後輩たちに関東昇格の夢を託して、自分の人生を先に進めたいと考えています。

このまま終わりにたくない

仁賀 雅之（4年 メンタル）



私が今思うことは、ア式という組織で活動してきて本当に良かったということと、ア式での経験を絶対無駄にしないということです。

ア式で活動して良かったと思う理由は、素晴らしい先輩、同期、後輩たちに巡り会えたということに尽きます。日常の些細な振る舞いからこだわる人、1年生に介入し積極的に巻き込もうとする人、もっとこうしたらいいんじゃないかと自分から意見を言える人、色々な人がいましたが自分1人では到底及ばないレベルでチームのことについて考えていた人ばかりでした。そのような人たちと意見を交換する度、気づかされ、刺激的であり、視野が広がったのを覚えています。本当に貴重な経験でした。

もう一つのア式での経験を無駄にしないとは、ア式での失敗経験を踏まえ成長したいということです。もともとア式に入った理由であり目標は高校の部活の延長線上である“めちゃくちゃ上手くなる”、ただそれだけでした。しかし最後の試合ラスト5分出ただけの、その程度の実力です。誰よりも時間やお金を費やした自信があり、いつか必ず自分の納得できるレベルに到達できると信じてきましたが、結局はその程度で終わりました。今思えば結果を求めて焦りすぎていたこと、自分が正しいと思うことを信じきれなかったこと、自分の力を過信していたこと、などなど、とにかく自分を律せられなかったことが全ての失敗の原因だと思っています。

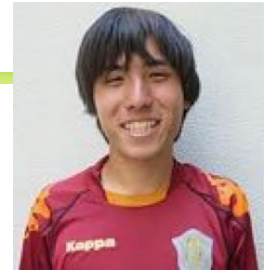
私は今までの人生で成功体験をしたことがありません。満足のいく結果を残したことがないです。高校の最後の選手権では都ベスト32で敗退し、大学受験では第一志望校を50点差で落ち、ア式での最後はラスト5分出場で終わりました。そんな経歴です。“情けない、自分には何もできない”とも思いますが、“このまま終わりにたくない、自分が自分を信じられるようになりたい・・・”今は、その思いを強く持っています。それが私がア式を引退した後、今思うことでもあります。

このような素晴らしい経験、充実した経験をさせていただけたのも、OBの方々のご支援があってこそだと思っています。本当にありがとうございました。この経験を生かし自分自身の成長に生かすと共に、今度はア式を支える側として、ア式に恩返しをしていきたいと考えております。今後ともよろしくお願い致します。



4年間を振り返って

藤井 拓郎 （4年）



一橋大学に入学し、一度は遠ざかっていたサッカーに対してもう一度全力で打ち込みたいと考えてア式蹴球部に入部してからの4年間は、これまでの人生の中で最も苦しく、最も輝いていた4年間でした。練習では周りの仲間についてゆけず、足を引っ張るようなプレイも多々してしまい、試合では相手に翻弄されてしまうことも少なくありませんでした。ピッチ外の生活では食事を管理しなければならず、時には量が少ないとフィジカル班から名指しで批判を受けるなど、本当に恥ずかしいことも多く、部活動中は辛かったです。だけど引退後にこうして思い返してみると、こうした辛いことがあったからこそ“今度はうまくやれるように、次こそは見返してやれるように”と努力を続けられたし、日々の生活が充実していたのだと感じました。苦しいことが何度もあったからこそ、それを一つ一つ乗り越えた時の達成感もそれだけ多く、大きかったのだとも思います。

引退してからというもの、僕は日々メリハリのない、墮落した生活を送っております。こうしたらしい生活を送っていると、自分が環境・仲間に依存してしまう弱い人間であることを改めて認識させられるとともに、ア式が素晴らしい仲間、環境を提供してくれる最高の部活であると感じました。特に仲間の影響は非常に大きく、高校時代にサッカーをプレイしていなかったために足を引っ張ってしまっていた僕に対して、数え切れないほどのアドバイスをくださった先輩方、ピッチでは先輩後輩の関係など気にせず、正直に忌憚なく意見をくれた後輩たち、そして時には激しく叱りつけ、時には褒めて励ましてくれた同期の皆には感謝の念しかありません。何度も心が折れそうになったけれども、ずっと部活を続けられたのは、こうした素晴らしい部員が傍にいてくれたからだと思っています。本当にありがとうございます。

最後になりましたが、これまであらゆる面において支援をしてくださったOBの皆様、本当にありがとうございました。OBの皆様のおかげで私達は最高の環境でサッカーをすることができました。そして後輩の皆さん、僕らの至らなさ故に東京都2部まで降格してしまったことに対して、謝罪の言葉と激励の言葉を送らせていただきます。本当に申し訳ありませんでした。そして、僕らの成せなかった関東昇格を実現できるようこれからも頑張ってください。

夢から覚めて

藤原 慧（4年 用具・施設）



最近、引退してから初めて練習に顔を出しました。約3か月ぶりです。行って思ったのは、とても3か月とは思えないほど、部活は遠い存在になっているという事でした。3か月といったら新チームが発足してからリーグ戦に入るまでの半分程度の時間です。部活をしている頃は、短くてしょうがなかった3か月でした。たったの3か月で、僕にとっての部活は、とても遠い存在になってしまいました。

去年の活動停止と後期リーグ戦の不戦敗は、まだ記憶に新しいものです。何をしていても部活動停止に対してただただ悔しく、自分自身の後悔、悲しみが強かったのを覚えています。一方で、ホームページに寄せられたメッセージや、OBの方々の写真付きのメッセージなど、心動かされる感情も覚えています。この先の人生で、ここまで強い感情を持つことがあるのか分からないほどです。ただ不思議なことに、今では自分にとってこの件が些事であったかのような印象があります。問題そのものが些事だったと言っている訳ではありません。ただの大きな事件として、自分の年表に太文字で記入されているような、そんな感覚です。そして思い返すと、逆に現役の頃の自分がおかしかったのではないか、夢に浮かされていたのではないか、と思うようになりました。活動停止になったからって死ぬわけでもないし、就職できないわけでもないし、もてないわけでもない。大変な事件だった、部として、個人として見直さなければならない点が幾つもあった、そんな言葉、そのもののような出来事だと思っています。しかし、当時の僕にとってはそんなものではありませんでした。先輩方やOBの方々に対する申し訳なさ、関東昇格という僕らの代としての目標への絶望感、また今まで引っ張ってきてくれた同期の思い、そんなものが混ぜこぜになっていました。これこそが、夢に浮かされていたという事なのでしょう。

ア式にいる間に見せてもらっていた夢は、本当にいい夢でした。タイミング的に1部昇格をして1部の舞台で戦わせてもらえる、運のいい代にいた事もあります。もちろんそれだけではありません。一番印象に残っているのは、おととしの関西遠征でのことでした。関西という縁もゆかりもないように感じていた場所での試合で、かなり先輩のOBの方が数人観戦に来てくださり、“普段は関西にいるからネットとか西松会新聞でしか情報が入ってこないのだけど、3年に1度、一橋が関西に来て試合をするのを楽しみにしている”と話してくださいました。何年たっても、遠く離れていても、自分たちの活動や夢を応援してくれる人たちがいることを強く実感できた出来事でした。

夢から覚めると、もう同じ夢には戻れません。

もちろん OB として応援していくことはできるけれど、現役の選手や当時の自分のように同じ夢に浮かされることはできないでしょう。4 年間、僕に関わって夢を見させてくれたア式の関係者の方々みんなに感謝したいです。それから、活動再開後にキモいことと言って辞めようとしていた僕を、半ば無理やり続けさせてくれた同期にも、ありがとう。後悔するようなことはいっぱいあったけど、ア式の活動をやってきたこと、辞めなかったことを後悔したことは、ありません。ありがとうございました。



臙脂色の記憶

船越 弘晃（4年 広報）



理不尽と捉えることが正しいのか、それとも我々ア式蹴球部の未熟さが招いた当然の因果であったのか、今となっては考え直したくもないことではあるが、向き合い続けなくてはいけない仕儀であるのは間違いない。サッカーができない、それ以上にア式蹴球部として活動できないことは、苦痛以外の何物でもなかった。

同期とのくだらない会話も、後輩の雑ないじりも、全てが懐かしく、日々刻々と過ぎいく時間と比例して、不安が増していった。このままサッカーができないのか、もう二度とア式蹴球部として活動はできないのか。東京理科大学とのトーナメント1回戦、主将・吉川の円陣の掛け声を再び聞いた瞬間、胸に熱い想いが込み上げてきたのは4年生同期全員が同じであったと思う

〈情熱〉〈不撓〉〈覚悟〉精神。

これは、私がこの部活動における根幹をなす価値であると考えている。

1年目、GMの小泉さんは、どんな境地に立たされても諦めることなく策を練り、練習では選手のレベルや学年分け隔てなく接してくれた。その際に必ず聞いた言葉は〈情熱〉だった。どれだけの想いをグラウンドでぶつけられるか。どれだけの熱量を真摯に、サッカーに、ア式蹴球部に向けられるか、小泉さんとの出会いが自分の中に〈情熱〉という言葉の価値観を植え付けた。

2年目、あの年は〈不撓〉と〈情熱〉という言葉が、最も体现された年だと感じている。前半戦、昇格が絶望的な結果で終えたにもかかわらず、夏の中断期間で飛躍的な成長を遂げ、1部昇格まで肉薄した。山雅というランメニューを含め、走り続けたあの夏。当時の4年生、特にGMの金田さんは、その中で常にチーム全体を鼓舞し続けていた。情熱を持って努力する尊さと、現状に諦めず、常に立ち向かっていく〈不撓〉の精神を、あの4年生たちの背中から教えられた。

3年目は、4年生全員の、“この1年で必ず昇格を果たす”という〈覚悟〉を感じた年だった。自分たちが1部でプレーしたかったという思いと、それが叶わぬ今は、“後輩たちに必ず1部でプレーさせる機会を与える”という思いを節々と感じさせられた。プレーだけではなく、練習以外でも後輩たちと積極的に接する先輩の姿に、どうにか恩返しをしたいという気持ちで、最終節も声援を送り続けていたことは忘れられない。

4年目、私を含む4年生全員が、引退時期の決断を迫られていた。
サッカーを続けたい思いがある一方で、後輩たちから邪魔だと思われないか、
もうサッカーはいいんじゃないのかとサッカーを諦める思いも、また存在していた。
狭いミーティングルームで様々な思いが混雑し、なかなか答えが出ない中、
決断を下したのは同期 GM の吉田だった。

4年全員でサッカーを続ける。彼の下した決断だった。
後輩のプレー機会を奪うのであるから、それ相応の〈覚悟〉を持って練習に挑む。後輩たちに
我々4年生が示すべきは、サッカーに対して、ア式蹴球部に対しての〈情熱〉である。
どんな環境、どんな結果になろうとも〈不撓〉の精神を持って最後まで戦い抜く。
サッカーを続けられる環境に感謝し、そして後輩たちに自らが先輩たちから受け継いできた
想いを伝えるべく奮励した。

後輩たちが今年、翌年、翌々年どんな戦い方をしていくか非常に気になっている。
可能な限り応援に駆けつけ、そして、その時に私たちが残そうとしていた思いが感じられたら
幸いである。ア式蹴球部での4年間で多くの方々にお世話になり、最高の4年間で過ごすことが
できました。本当にありがとうございました。



今の思い

本間 拓郎（4年 イベント・応援）



引退して以降、旅行や遊びを中心とした、俗に言う大学生らしい生活を送るようになり、卒業前の留学も予定している現在、この4年間にサッカー部中心の大学生活を過ごしてきたのかを感じます。

練習のある日には5時過ぎに起床し、練習のない日にも8時半には目覚ましをかけ、3食の写真を送り、内容や時間を管理される。1年のほとんどを体のどこかに痛みを抱えながら、慢性的な疲労を感じながら生活し、お酒を飲むこともなく日が回る前には眠る。今考えるととても我慢できないような禁欲生活を、よくもまあ4年間も頑張ることができたと思いますが、在籍時にそれに対する苦痛を感じていたわけではなく、当然時期によってはモチベーションに波はあったものの、日々サッカーができる喜びを噛み締めながら部活に向かっていました。

最後になりますが、この充実した四年間をア式蹴球部で過ごすことが出来たのは、私たちの代についてきてくれた後輩達や同輩はもちろん、多くを部活に遺してくださった先輩方、そして試合の応援や寄付金など、様々な形で私たちの活動を支えてくださるOBの方のおかげです。心の底から感謝申し上げますと共に、今後私も西松会の一員として、長期に渡って現役の活動をサポートしていきたいと考えております。今後とも宜しくお願い申し上げます。



🏐 今思えば

河野 香苗（4年 MGR）



部活を引退した今、私がどのような日々を送っているか、そして今、現役時代を振り返ると何を思うか、ということについて書きたいと思います。私の現在の生活は就活、アルバイト、その他、で成り立っています。

①就活

私は就職浪人をするので、今年再び就活をしています。最近は何をしているかというと、キャリアウーマンらしさを演出するために髪を切りました。また“どうせ汗で落ちるから”と部活では、ほぼノーメイクでしたが、最近はお化粧の練習をしています。また、ゼミの先輩に勧められて『内定童貞』という本を読みました。タイトルから品のなさが滲んでおり、内容もその印象にたがわず所々下品ですが、読むと元気が出るので現役の皆さんにおすすめしたい1冊です。

②アルバイト

私は塾講師とピザ屋でアルバイトをしています。これまで私はバイトを選ぶのが下手で、一癖あるバイトしかしたことがなかったのですが、塾のバイトは本当に楽しくて、初めて“ずっと続けたい”と思っているバイトです。ピザ屋は常に人手不足で、クリスマスやお正月は恐ろしく激務です。他のバイトメンバーはヤンキーばかりで、真夜中に“これから遊ぼうぜ”などと電話してくるので、カルチャーショックを受けます。ひと癖あるバイトです。

③その他

友達と遊んだり買い物をしたりします。遊ぶと言っても、カフェでずっとお喋りするか、鳥貴族に行くか、というパターンが殆どです。それから、最近は顔の丸さが気になっています。マネージャーと言えども、現役時代は小平まで自転車を漕いだり、グラウンドでボール拾いに走ったりと、部活が運動になっていましたが、引退してからは太る一方です。危機感を感じて筋トレを始めました。

ここまで読んでくださった方にはお分かりと思いますが、かなり味気ない毎日を送っています。こんな生活の中で、ふと部活があった時のことを思い出すと、現役時代は全く考えもしませんでした。が、“もしかしてア式にいた頃はキラキラしていたのではないか？”と気づきます。

今は何に縛られることもなく、試合のために埼玉の奥地のグラウンドに出向くこともなく、オフの前日以外にも好きなタイミングでお酒を飲めて…と自由で楽しい一方で、少し部活の空気感が恋しいです。生活の軸に部活があって、いつも部活のことで何かしら悩んでいて、それでもチームのために、という気持ちで、日々がむしゃらに生きていたように思います。

現役の時は、将来の夢のために海外の大学で勉強する友達や、小学生の時から

“先生になりたい”と言い続け、実際に教員採用試験に受かった友達の姿を見ていて、

“私は部活以外何もしていない”という焦燥感に駆られたこともありました。

今でも将来のことを考えて、何かに必死になれるのは本当に素敵なことだと思っているし、

そういう人たちが羨ましくないと言ったら嘘になります。それでも部活生活が終わった

今考えると、ア式でマネージャーをしたことでしか得られなかった経験、

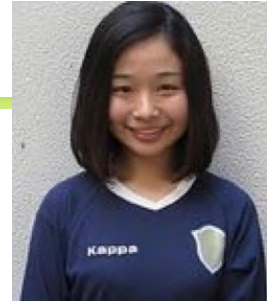
感じられなかったこともまた沢山あり、十分に人に誇れるものだなと思っています。

4年間ア式の一員でいられて良かった、というのが、今の素直な気持ちです。



支え

山口 千尋（4年 MGR）



部活を引退してから、約2ヶ月半が経ちました。

私の生活は現役当時からガラッと変わり、長期の海外旅行に行ったり、あまり会えていなかった友人に会ったりと、残り少ない学生生活を充実させるべく、今まで出来なかったことを楽しんでいます。現在は卒業旅行でセブ島に来ているところです。久々にア式の同期と集まって、とても楽しく過ごしています。

私にとって、ア式での4年間は、間違いなく今までの人生で最も濃密なものでした。マネージャーとして、どうしたら効率的に練習を進められるのか、チームの勝利のために自分には何ができるのか、色々なことを考えて、悩んで、全力で部活に取り組んだ4年間でした。毎日本気で打ち込んできたからこそ、試合で仲間と分かち合った勝利の喜びと感動は、この先も一生忘れません。

4年時には、東京都1部の舞台に立つことになり、不安と期待で胸を膨らませつつ、一橋としての誇りを持って挑みました。私自身、マネージャー長という立場に立たせて頂き、関東昇格を達成するに相応しいマネージャー組織を目指して、組織運営に尽力しました。最高学年としての責任の重さや、就職活動との両立などで悩むこともありましたが、そんな時に支えになったのは、関東昇格を本気で目指す仲間の姿でした。いつでも真面目に熱意を持って部活に取り組む部員の姿を見て、私ももっと頑張ろうと元気づけられていました。

夏には活動停止処分が下され、1部での挑戦は潰れてしまいましたが、その苦難を乗り越えられたのも、多くの人の支えがあったからだと思っています。処分の早期解除を目指して積極的に行動してくれた部員の皆、お忙しい中で処分解除のために尽力してくださったOBの方々、本気で気にかけてくれた他団体の友人たちなど、多くの方のお力添えのおかげでチーム一丸となって乗り越えられました。4月からは社会人になりますが、ア式での経験を糧にして、周囲の人との関わりを大切にしながら頑張りたいと思います。4年間ご支援頂き 本当に有り難うございました。



平成 30 年度シーズンに向けて



「理念」と「笑顔」

倉崎 嘉幸 （昭 57 卒）



最近は、グラウンドに足を運ぶ機会が減り、
もっぱら学生のホームページ、ツイッターでの応援となり残念です。
そんなサイバー応援団の1人として、日頃感じていることを書かせていただきます。

最初に「理念」です。

一橋大ア式蹴球部の「理念」という表現がホームページ上に出てきたのは、2年前でした。
最上級生が新組織を立ち上げるにあたり、年度の目標、スローガンのものは毎年作られ、
共有されていました。敢えてそれを理念と表現したところが新しい点です。
毎年、足りないところ、弱いところは補正し、強みはさらに伸ばす仕組みができていましたが、
毎年、方針が変わりすぎたり、よいところもいつの間にか失ってしまう傾向があったと思います。
「理念」には、変わらないベースを作っていく覚悟のようなものが感じられました。
また、“良い結果は、よい関係性から生まれる”と言い切ったあたり、見事だと感じました。

次に「笑顔」です。

これも2年前のホームページ上のメンバー紹介が、例年になく笑顔になりました。
アメリカの高校のアルバムと見紛うような、あふれるような笑顔でした。
東京都3部から2部に昇格後、この試合に勝てば昇格という試合が4年にわたり、
5-6試合あったように記憶しています。その壁は厚く、毎回跳ね返され続けました。
昇格の前の年も、春期は本来の力を出し切れていない試合が続きました。
その後、夏場に鍛え、一部ポジションも見直して、秋季の快進撃に繋がりました。
秋季リーグの最終戦に勝てば昇格でしたが、あと1歩届きませんでした。
何が足りないのか、どうすればいいかを、真剣に考えたのでしょうか。
それが、「理念」や「笑顔」につながったものと思います。

この「笑顔」を昨年のツイッターでも見つけました。それは、昨年秋の活動停止中でした。
地域貢献の一環で、サッカー部の学生が、国立の秋祭りで神輿を担いでいる写真が
アップされました。秋季リーグを前にした活動停止は、昇格直後の春季リーグで強豪と
互角に渡り合い、秋季の結果によっては関東リーグへの入れ替え戦の可能性がある中での、
不測の、驚愕の事態でした。そのような中での、秋祭りの写真には見入ってしまいました。
そこにも「笑顔」がありました。1部昇格という栄冠は、最後のあと数センチのところを、
「理念」と「笑顔」が手繰り寄せたように思えました。

学生は東京都3部から2部、2部から2部へと着実に進んできました。
 その特徴は、学生自身が考え抜いた学生主体の取り組みであるところです。
 心・技・体のユニット制の進化、イヤブックなどの広報活動の着実な強化の延長線上に
 「理念」や「笑顔」が出てきたと思います。これまでの学生のアイデア、創意工夫、
 実行力には目を見張るものがありました。昨年は、言葉を失うような残念な年でした。
 今年はそれも糧にして、これまで積み上げてきたものに自信を持ち、
 更なる高みを目指して前進してくれることを祈念しています。

＊活動停止中に地域貢献活動をする一橋大学の選手たち＊



東京都大学サッカー連盟 HP より

「技術力」と「組織力」の向上を

中野 正樹（3年 新主将）



私たちア式蹴球部の今年度の目標は「1部復帰」です。

一昨年の36年振りの1部昇格と昨年の部活動停止処分による2部降格。

歓喜と絶望、いずれも経験したことのないほど強い感情を伴って私の心に刻まれました。

そしてこの結果だけを見た外部の方はこう考えるかもしれません。「結局、一橋また振り出しに戻ったな」と。しかし、今年戦う舞台は2部ではありますが、昨年1部で戦った経験が消えてなくなるわけではありません。実際、昨年度の活動に対する現役の捉え方は、部活動停止処分を受けた年ではなく、1部のチーム相手に全力で挑み、経験値を得た年であるように思います。部活動停止を重く受け止めつつも、4年生が残してくれたスピリッツや思いを継承していくこと、前に進むことが何より重要であると考えています。現に今年の目標は「1部復帰」であり、長年掲げ続けてきた「1部昇格」ではありません。微妙なニュアンスではありますが、組織として前進しているという現役の前向きな気持ちが反映されています。

この目標を達成するためには「技術力」と「組織力」の向上が必要です。

「技術力」の向上に関しては、GM岡谷の綿密な練習計画を実行していくことに加え、今年から取り組んでいる練習後の自主練習の効率化が好影響を与えていると考えています。また「組織力」の向上に関しては、関係性を重視した部員同士の団結力を重視することに加え、各ユニットの仕事を見直すことによる運営面での改善にも着手しています。今年度の序盤、GM岡谷を中心にミーティングを重ね、各ユニットの存在理由の見つめ直し、目標の設定、仕事内容の設定を行いました。その結果、広報ユニットによる東工大との定期戦の開催やメンタルユニットによる心理テストのフィードバック等、各ユニットに新しいことに挑戦する機運が高まっています。技術面と組織面、どちらもより良いものにするために妥協しない姿勢を貫いていく所存です。

今年度2部での戦いにおいて、油断をしている部員は一切いません。

ア式蹴球部が再び1部に戻るために、組織として前進するために、全力で頑張っていきたいと考えています。今年1年宜しくお願い致します。



「熱狂」で「1部復帰」

岡谷 真広 （3年 新 GM）



OB、OGの皆様、日頃より私たち現役の活動をご支援いただき、誠にありがとうございます。今シーズンの私たちの目標は「1部復帰」、スローガンは「熱狂」です。OB、OGの皆様をはじめ、この部に関わる全ての方々を「熱狂」させる試合をし、必ずや1年での「1部復帰」を果たします。

上記はチーム全体での目標ですが、私にとってラストイヤーとなる今期、個人的な目標が2つあります。「リーグ最少失点」と「関東昇格の土台を作ること」です。

1つ目の「リーグ最少失点」は、昨シーズンも個人的な目標でした。しかし、1部リーグの攻撃陣を抑えきることができず、多くの失点を重ねてしまいました。特にセットプレーからの失点が多く、私たちの守備のむろさを痛感した1年でした。今シーズンこそは個人の守備技術、守備意識、チームの守備技術、守備意識をさらに高め、必ず「リーグ最少失点」を成し遂げます。

2つ目の「関東昇格の土台を作ること」は、私にとってア式生活最大の目標です。残念ながら私たちの代で「関東昇格」を果たすことはできませんでした。しかし、今まで以上の努力を継続していけば、将来必ず「関東昇格」を成し遂げることができるはずです。私は私たちの代でその土台、基礎を作り上げたいと考えています。サッカースタイル、運営のシステムはもちろん、サッカーに対する考え方、ピッチ外での姿勢などでも「関東昇格」を意識して、その考え方、姿勢をチームに根付かせたいと思っています。

フォーメーションなど変化していくものがある一方で、将来も変化しない考え方、伝統といったものがあります。私はそういう変化しない伝統を作り上げたいと考えています。大きな目標ではあると思いますが、「関東昇格」を成し遂げる後輩の考え方の基礎を私たちが作り上げた、と将来言えるように、今シーズンは今まで以上に考え、努力し、後輩に思いを伝えていきます。

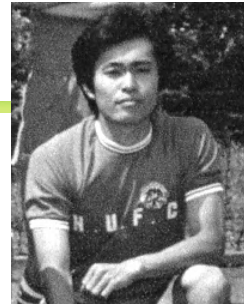
私にとってラストイヤーとなる今期は2部リーグから再スタートとなりますが、「関東昇格」を見据え、1年での「1部復帰」を目指します。「リーグ最少失点」という付録付きで、必ず「1部復帰」を成し遂げますので、今シーズンもご支援、ご声援のほどよろしくお願いいたします。



スペイン マドリッドから

岩田 淳一（昭 58 卒）

現在、スペインのマドリッドにいます。三菱商事とスペインのパートナー BERGE グループとの合併先で働いています。



1) 一橋大学インターンシップ

ちょうど今月 2 月に一橋大学の学生 6 名を BERGE グループが 5 週間のインターンシップ（これで 7 単位取れるそうです）で受け入れている所でした。BERGE グループは、毎年この時期に 6 名の一橋大学の学生を受け入れており、今年は 11 年目になります。スペインの企業で働きながらスペインを観光できる、サッカー観戦ができる、スペインの文化を知ることができる最高のプログラムです。私たちの大学時代にはこのような海外でのインターンシップ・プログラムは無かったので大変うらやましい限りです。一橋大学全体で毎年 120 名程が留学やインターンシップ等何らかのプログラムで海外に行っているというのを聞いて驚きました。

＊在スペイン日本大使公邸での会食＊



水上正史 在スペイン日本大使は一橋大学出身（昭 53 卒）、
平田公使も一橋大学出身（昭 61 卒）です。

インターンに来ている一橋大学学生が、研修3週間目に入って日本食が恋しくなったということで行きつけの日本レストランへ連れて行った所です。学生の皆さんの嬉しそうな顔！食事をしながら学生の皆さんの将来の夢、就職についての話をします。

今回の一橋大学のインターンシップの学生には2名の韓国人の留学生が入っていて、流暢な日本語を話します。BERGE は同時期に韓国からも4名の大学生をインターンシップで招いていて、日本の大学生の人数を多くしているにも関わらず、結果として韓国人が6名、日本人が4名となっています。海外にいと中国人や韓国人の海外に出てくる積極性が目立ちます。来ている学生の話の聞いていると、皆海外に行ったことがあるか、興味を示しており、意識の高さがうかがえます。サッカー部の現役の皆さんも折角一橋大学に在籍しているのですから、BERGE とのインターンシップに応募して是非スペインに来てください。大歓迎いたします。



2) スペインサッカー事情

マドリッドといえば、2016年と2017年のクラブW杯で世界一となった REAL MADRID の本拠地、サンチャゴ・ベルナベウ・スタジアムがあります。私も時々サッカー観戦に行きますが臨場感がたまりません。8万5000人が入るスタジアムですが、グラウンドと観客席が近く、劇場のような競技場です。1階では試合中のクリスチャーノ・ロナウドやマルセロを10m位の近距離で見ることができる迫力ある席もあり、非常に刺激的です。サッカーをやっているよかったと思う瞬間です。



サンチャゴ・ベルナベウ・スタジアム

昨年のクラシコにて
(レアルマドリッド vs バルセロナ戦)

スペインのリーガ・エスパニョーラで活躍している日本人選手と言えば、柴崎岳選手（GETAFE）と乾貴士選手（EIBAR）。2人ともチームの中では信頼されています。スペインのように来た当初、言葉が通じない国でチームの中で信頼を得るのは非常に難しい中、2人ともチーム内でのポジションを獲得しています。GETAFE はマドリッドの郊外にあります。先日 GETAFE 対 EIBAR の試合を日本人会の皆さんと一緒に観戦に行きましたが、リーガ・エスパニョーラ全体で日本人を歓迎する仕掛けを行っていました。現役だけでなく OB の皆様もぜひスペインにサッカー観戦に来てください。

3) サッカー遠征、その他

大学の現役時代では、三商大戦や大阪遠征で、大阪経済大学や大阪体育大学と対戦したのも良い思い出です。大阪体育大学との対戦では2対5で負けたのですが、一橋大学相手に大勝できなかったとして、試合後に大体大の選手が試合に出ていた人も含め、ダッシュを何十本もやらされていたのにはびっくりしました。遠征は異なる環境、文化、食べ物等を同じサッカーをしている仲間と体験できる良い機会です。

時代が変わったなと思うのは、私は神奈川県湘南高校出身ですが、高校時代にサッカー部で静岡県藤枝遠征に行き、全国大会に出るような強豪校と戦ったのが非常に良い思い出となっていますが、現在の湘南高校サッカー部は、2年に1回スペインのビルバオに遠征に来ます。高校生でスペインのサッカーに接することができるなんて、何と素晴らしい。今年の3月末に同校の現役が来ますので、それも楽しみです。

サッカーはインターナショナルなスポーツですので、一橋大学もぜひ近隣諸国の大学と一戦交える事を考えてはいかがでしょうか。私自身三菱商事に入ってサッカー部で中国、シンガポール、インドネシアに遠征に行きましたが、各地で大歓迎され大変良い思い出になっています。アジア・アセアン諸国はどこに行ってもサッカーは人気ですから、国を超えた交流ができます。現在は国境を越えた交流が盛んです。昨今、一橋大学には放送大学も含めて韓国や中国等海外からの学生も沢山来ていると聞いてます。是非海外からの学生と積極的に交流し、視野を海外に向けて、サッカー含めて自分達の可能性を追求してください。

では、OB 並びに現役の皆さま、スペインに来られる日をお待ちしてます！

美味しいスペイン料理とサッカーで歓待いたします。

メールアドレス：jiwata@mmce-net.com



小平へ短期留学

宮崎 弘喜（平6卒）



大学を卒業後5～6年の間は東京で働いていたが、諸事情あって広島へ戻ることになった。その後は出張等で上京することはあっても、武蔵野まで足を延ばすことはなかった。しかし一昨年の異動で2週間、東京で研修を受けることになった。場所は小平市の「国土交通大学校」とのこと。調べてみると最寄りの駅は西武多摩湖線の「一橋学園」であり、小平分校から徒歩で10分足らずの場所であった。こんな偶然もあるのだなと随分驚いた。

研修の初日は朝から講義があるため、前日は東京に泊まる必要があった。国立在住の大学時代の恩師（ゼミでお世話になった村井先生）へ連絡しお宅に泊めてもらった。隣に居を構える、今は弁護士の娘さん一家も参加して大変楽しい時間を過ごした。思い返せば、司法試験を目指すような勉強熱心なゼミ生が多い中、私といえば、お世辞にも出来が良いとは言えない生徒であった。ただ村井先生は非常に可愛がってくださったと思う。理由はよく分からないが、恐らく酔っ払って先生を「村井ちゃ〜ん」と呼ぶような生徒が面白く感じられたのではないかと思う。或いは当時小学生であった先生の娘さんが私に懐いてくれたからかもしれない。何にしる温かく受け止めてくださった先生の寛容さに感謝している。

滞在中、折角なので小平分校を散策してみた。

講義棟の建っていた敷地の中心部は留学生用の住居と思われる建物に代わっていたが、部室の入った建物や、その眼前の平屋（春合宿で利用していたと記憶している）は、そのままであった。グラウンドも覗いてみたが、誰もいなかった。グラウンド奥の更に老朽化したキック板が、妖怪の「ぬりかべ」のようだった。



2010年



2017年

学生時代によく通った店にも行った。
中和寮で同じ部屋に住んでいた同期の向畑が、
わざわざ小平まで足を運んでくれたので、一緒に
豚カツの「藤乃木」に行きフロ（吹雪ロース）を
食べた。現在のマスターが我々のことを覚えて
いてくれて、驚くとともに嬉しかった。完食は
無理かと思ったが、二人とも平らげた。



ふぶきロース定食 1,180 円

注)「ふぶきロース定食」は、トンカツの上に大根おろしをたっぷりのせ、ポン酢をかけて
いただく。私（昭 52 卒）の頃にはなかったが、今や小平名物になっているようだ。

・ 福本編集長 追記

その後、国分寺へ移動し居酒屋の「惹凱牡（じゃがいも）」へ行った。
当時のマスター夫婦はそのままで、見た目も変わっていないように感じられた。
ここでも我々を覚えていてくれて、一緒に記念写真を撮った。
マスターは、最近の蹴球部員は酒をあまり飲まないことを残念がっていたが、
真っ当な心掛けだなと感心した。

2016 年 5 月 撮影



稀有な機会に恵まれ、懐かしい武蔵野を訪れることができ、良い思い出となった。
今度上京する機会があったら、また遊びに行こうかなと思っている。



平成4年(1992)

山中湖での夏合宿中、練習試合後に撮った写真。なお、
筆者は写真嫌いのため写っていません。最前列のど真ん中が、同期の向畑。
当時は体も引き締まり、いい男だったんですが・・・(笑)

何年たっても変わらない

斎藤 隼人 (平 21 卒)



昨年末、年度幹事である同期の宮内くんから、「酉松会新聞よろしく」という LINE が飛んできましたので、僭越ながら同期を代表して寄稿させていただきます。まず、下の写真をご覧ください。私が勤めている愛知の自動車メーカーに、2017年新卒入社してきた2名の可愛い後輩です。この日は入社式前日。同じ会社に勤める先輩、ゴリラ佐藤の「入社式、出られなくしてやろうぜ」という人間性を疑うコメントのもとに開催された、如水会愛知支部（勝手に名付けてます）の恒例イベントです。私の時は、入社式当日、マスコミ各社が集まっている中、気持ちが悪くなって何度もトイレでリバースしました。彼らは無事に入社式を終えることができたようで、安心しました。

★平29卒：大口くん、森本くん



★平19卒：二人を潰して悦に入るゴリラ佐藤



次に、右の写真。

これも昨年4月頃だったと思いますが先輩の結婚式の二次会でのシーン。何故かはよくわかりませんが一発芸をしないと気が済まないんでしょうね。内輪では盛り上がりましたが、会場全体としては微妙な空気が流れていたことを記憶しています。



★平19卒：サンシャインヒロマサ

最後に、こちらの写真を。残念ながら私は予定が合わず参加できなかったのですが、昨年末に年次の近い人たちと集まった際の、同期の倉田くん（H21卒：〇サイククラタ）の様子です。完全にキマってます。



前置きが長くなりましたが、人って良い意味で変わらないですね。就職して以来、人事の仕事をしており多くの方と接する機会があります。ダイバーシティ化が進むこのご時世、多種多様な価値観があります。ただ、その価値観の土台っていつ作られたのだろうかって考えると、大学時代に打ち込んでいたものが、間違いなく大きい要素のひとつになっていると思います。現役時代、本当にサッカー漬けの毎日でした（多分）。目標に向かって目の前のことに全力で。例えば今の現役も食事管理をしていると聞いてますが、我々も似たようなことをしていました。今でも覚えていることは、「秋季最終戦、終わったら一橋学園駅前のマックでポテトを食べまろうぜ！」と、同期と約束してました。でも、あんなに食べたかったマックポテトをいざ最終戦後に食べると、そんなに美味しくなかったんですよね（今食べるとめっちゃ美味しい）。どこかストイックで、どこかでネジがぶっ飛んだサッカー部での4年間で心身ともに鍛え上げられたのは間違いないでしょう。いまだに飲み会では、指1本喉に入れてトイレに行けば、フェニックスのように蘇って飲み続けることができます。

¥



＊2008年10月 秋季リーグ最終戦後に同期＋1つ下の女子マネたちと＊

長くなってしまいましたが、卒業される4年生の方は、本当にお疲れさまでした。
色々な想いがあると思いますが、それはきっと将来に生きてきます。
3年生以下の皆さんは、サッカー部生活を楽しんでください。
部活は4年間で終わるけど、終わった後も、全力で打ち込んで培ったものは、続きます。
最後になりますが、如水会愛知支部の拡大に向けて、弊社では学生募集中です。
就活エントリーをお願いします。

2014年：中国赴任時の小職

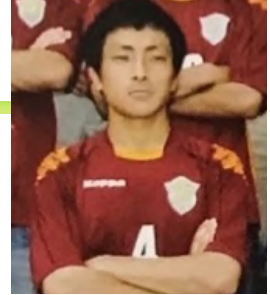


2017年7月：アルゼンチン出張時



目減りしないメンタル

高松 俊（平 24 卒）



先日友人に「何かを 10 年くらいやり通した人って、謎の持論持ってたうざい」と言われたので、私が人生で唯一 10 年以上ガチで取り組んだサッカーから得た謎の持論と、それが今どう活かされているかについて考えてみました。

私は「ガチで取り組み続けると、“開眼”する瞬間が必ずや来ると思えるメンタル」を得られたと思います。この考えは大学時代の以下の経験に裏打ちされています。大学 2、3 年くらいの時に、明確に自分の中で「これか!」という気づきがありました。いわゆる「ポジショニング」に関することなのですが、肌感覚？脳の髄で？サッカーを理解できたというか、とにかくそれから、試合中に気を配ることが変わり、プレイスタイルが変わりました。以来サッカーを何倍も楽しめるようになりました。

これは意外と社会人になってからも考え方の根底にあって、私の仕事はテレビ番組の制作で、「おもしろいとはなんぞや」という壮大すぎる命題を日々つきつけられているのですが、全然うまくいかず、放送前は毎回ボロ切れのようになりながらも、「（開眼するまで）もう少し頑張ってみるか」と無謀にも思ってしまうのです。おかげさまで「高松はメンタルが目減りしない」という、まったくうれしくない評価を勝ち得ています（M だけかもしれません）。

現役時代には「なんで大学生になってまで週 5 でサッカーしてるんだろう…」と思ったこともありましたが、技術・知識・経験がある容量に達したときに突如開眼する感覚みたいなものは大学サッカーを通じて学んだことです。もし現役生でサッカーを続ける理由に迷いが生じている人がいれば、「大学生になってまで週 5 でサッカーをしたからこそ見える地平」もあるということを、厚かましくもお伝えしたいなと思います。

今年は折を見て試合や練習にも顔を出したいと思っています。がんばってください。それと昨年ひそかに九州から戻ってきたので東京にいる同期や先輩・後輩方は飲みにいきましょう。



写真①

未開拓の地域や秘境が好きで、
昨年旅行で行った中国（東チベット）
のアチェンガルゴンパという僻地へ。
行くだけで日本から3日かかる。
4000mの高地でチベット仏教徒が
煩惱を捨て去るべく
来る日も来る日も祈り続ける。



写真②

その後再び訪れた中国で夜の街に
くり出そうとする直前の私
a.k.a 煩惱のカタマリ

🏆 社会人への第一歩を踏み出して

宮村 開人（平 27 卒）



「私の学生 LIFE・今昔」というテーマをいただいたので、去年の春まで法科大学院に通い学生をしていた私ですが、大学時代を振り返ってみようと思います。

大学 4 年間のほとんどの時間はサッカー、サッカー部に関わること（メンタルトレーニングの準備など）に費やしていました。そのため、大学時代の思い出のほとんどは小平のグラウンドや部室風景です。また、サッカーからの学生生活の思い出のほとんどにもサッカー部の同期や先輩・後輩の存在があります。

大学時代に参加した飲み会はほとんどがサッカー部でのものです。ある時には誰かが思いつきで応援歌が歌われ、歌われた人が断ることもなく飲み出し、ある時には一人の人間をみんなで輪を作り、囲みながら飲み、とにかく何をしてもみんなで笑いながら飲める飲み会が当たり前でした。

オフに行く旅行はいつも同期が一緒でした。新潟にスキーに行ったり、北陸に行ったり、グアムに行ったり、卒業旅行にはドイツとトルコに行ったり、私の代の旅行はいつも目的地くらいしか決めずに行き当たりばったりの旅行でしたがいつも何だかんだで楽しい旅行でした。旅の一番の思い出は何でもない車の中での会話だったりするのも私たちの代らしくていいものだなと、今振り返っても思います。

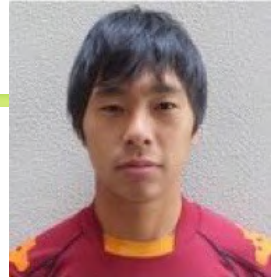
同期たちと食事に行く時には、私たちの中では食べ〇グの評価よりも信用性がある、ある同期の直感で店を決め、毎回大満足だったのもいい思い出です。入部当初にはいろいろあり、仲が良くないなどと言われたこともある私の同期ですが、卒業する頃には何でも言い合え、気を使わずに楽しく過ごせる最高の友人になりました。卒業してからも、定期的に集まり、何でもない話で盛り上げられる友人というのは、とても貴重なものだと思っています。

このように振り返ってみて社会人となった今強く思うことは、特別なイベントではない日常の中でも退屈することがなく、何でもない会話がいつも楽しかったことが、とても貴重なことだったなということです。学生の皆さんには何でもない日常の楽しさを大切に、学生生活を過ごしてほしいと思います。



ア式から世界へ

青木 崇（平 29 卒）



一度しかない大学生活。その大切な時間をア式蹴球部に捧げて良かったと心から思う。このような心持でいられるのはア式で過ごした4年間のおかげで今の自分に自信や誇りを持つことができていると日々実感しているからであり、また、たった今までア式時代の旧友と酒を飲んでおり、一時的にハイな気分になっているからでもある。

「人生は旅である。」とよく言われるが、大学に入って以降、私の人生は旅をしているかのような、刺激的な人生になっている。旅というのは決して旅行という意味だけではない。そこには新しい経験や体験という意味も含まれているし、もっといえば自分の内面を旅することもできると私は考える。大学時代に経験したのは、むしろ後者のほうが大きい。飲み会で記憶がなくなるくらい飲んで、仲間と馬鹿騒ぎしたこと。同期と合コンに初めて参加し、全然女の子と話せなかったこと。初めてのデート。初めての彼女。初めて、大学の公式戦に出場したこと。部員全員で1部昇格という、遠くてあいまいな目標を目指したこと。大した実力も実績もないにも関わらず10番を背負わせてもらったこと。楽しいこと、苦しいこと、悲しいことを経験する中で、自分の価値観や人間性なども少しずつ、少しずつ変わっていった。

大学卒業後、私は旅に出た。サッカーがやめられなくて、ドイツへ。未知の世界での経験は何もかもが刺激的で、楽しかった。日本と大きく異なる文化、ルール、国民性。自分の当たり前が、外の世界では当たり前じゃないということに気づいた。順応するには自分を変える必要もあった。旅行で行ったエジプトは裕福な国ではなかったが、日々をゆっくりと過ごす雰囲気や、市街では妙な熱気があった。

色々な遠回りをして、社会人になった。縁あって、運もあったのか、再びドイツに行く機会やアメリカで仕事をする機会が与えられた。そんなこんなで、入社してから半年たった今でも、目まぐるしく変化していく日常の中で生きている。それでもただ1つ確信していることは、私の旅のスタート地点はア式であり、最後に帰る場所はア式なのだということ。これからも色々な形で旅をし、たくさんの友人を作るだろう。もしかしたら、海外に移住するといったこともあるかもしれない。でも結局、おじいちゃんになってもア式の仲間と馬鹿みたいに笑い合っているだろう。みんなの笑顔に囲まれたまま、棺の中で旅を終える、というのが私の考える最高のハッピーエンドである。

2018 年 1 月 同期と卒業旅行（山口県唐戸市場にて）



🏈 武蔵小金井駅「学生班」

土井 徳秋（昭 29 卒）



僕が大学に入学するために故郷の広島から上京したのは、昭和 41 年の春のことだった。その年は後から振り返ると、いわゆる「大学紛争」の始まりを告げる年だったように思う。僕は早稲田大学も受験したが、早稲田の入学試験は機動隊に守られての入試だった。田舎からのこの出かけて来た僕は、この雰囲気には驚いた。いかにも田舎から上京した受験生に見えたのだろう、試験が終わって外に出ると NHK の取材記者につかまった。その夜の 7 時のニュースで僕のインタビューを放送したいのだと言う。大隈講堂の前まで連れてゆかれると一斉にスポットライトが光って、僕の周りをみんなが取り囲んだ。こんな経験は人生で初めてだった。結局 7 時のニュースでは映像は放送されなかったが、東京はすごいなと思った。あのスポットライトを一斉に浴びた瞬間は、今でも忘れられない。こうして僕の東京は、始まったのだった。

三畳一間の下宿。窓にはまだカーテンもかけてないから、外の道を走るバスの座席から僕の寝姿が丸見えだった。バスの乗客も見たくないものを見せられて実に嫌な気分だったろう。場所は武蔵小金井。窓の向かいには銭湯で、食事付き、確か月 9 千円の下宿だったように思う。一橋に合格した僕が、この辺にするかという実にはいいかげんな気持ちで武蔵小金井駅に下車し、ふらふらと捜し歩いた下宿だった。建物は古かったが、いろんな大学の学生が下宿していて、その点は面白かった。そんな下宿の先輩の 1 人から入学後アルバイトを紹介されることになる。

そのアルバイトは、武蔵小金井駅での「押し屋」。

朝のラッシュ時に電車に乗り切れない客を無理やり社内に押し込んで、電車を大きく遅らせることなく発車させる役目である。駅員だけでは人手が足りないので、学生アルバイトを採用していたのだ。時間は朝のラッシュ時だけの短時間。サッカーの練習には何の影響もない。学生は上着と帽子だけは国鉄のものを渡されて、腕には「学生班」という腕章をまく。そして指先確認などの基本動作をひと通り教わって、翌日からは駅のホームに立つこととなる。その頃は、国鉄の順法闘争なども何度も行われ、その日は、猛烈な混雑になる。お客さんも会社に遅れないように必死の形相になり、僕に向かって「押してくれ、押してくれ」などと声をかける。そんな時は、むらむらと職業意識に目覚め、お客さんの背中に向かって全力で体を預けるのだが、一度勢い余って体が全部車内に入ったと思ったら、ドアがバタンと閉まり、そのまま電車が発車してしまったことがある。結局そのまま次の駅まで行くことになるのだが、周りの乗客の皆さんは、この「学生班」の失態をうれしそうに眺めていた。あの頃の駅の風景は、まさに高度経済成長の時代を象徴するようなものだったと思う。



武蔵小金井では、もうひとつ忘れられないものがある。パチンコだ。

下宿のそばにユニークなパチンコ屋があった。そのパチンコ屋は書店と共同経営でパチンコ屋と書店が店の中でつながっていた。そして、その書店で売っている本が景品になっていたのだ。それも学生が読みそうな本だけが景品になっていて、本の裏表紙あたりに 320 などと数字を書いた小さなシールが貼ってあり、パチンコ玉 320 発で交換できたというわけである。自慢するわけではないが、僕が読んでいた文芸書などは、ほとんどパチンコで手に入れたものだ。大江健三郎全集も、パチンコの血と汗の努力で僕の本棚に収まることになったのである。というわけで一時、夜になるとパチンコに出かけるという時期があった。パチンコがしたいわけではなく、本が読みたい一心がそうさせたのだと、人には今でもそう言っている。

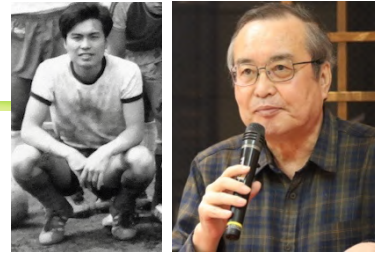
そして最後にサッカーのことである。場所は、駒沢第二球技場。相手は国士舘大学だった。

1 年生でレギュラーに起用された僕のポジションはセンターフォワード。関東大学リーグの 2 部にいた一橋大学は 3 部との入れ替え戦に追い込まれていた。スタンドには国士舘大学の応援団があふれ、チームの先輩たちはみんな厳しい顔になっていた。OB の先輩は僕に「君はセンターフォワードなんだからファイトをグッと凝縮させなきゃだめだ」と話されたのを、よく記憶している。正直なところ意味はよくわからないけれど、気持ちは痛いほどよくわかったが、試合は完敗に終わってしまった。今でも悔しい、あの頃、あの時代の思い出である。



ヤドカリ放浪記

杉山 正敏 （昭 49 卒）



私がサッカー部に入部したのは大学１年次が終わったばかりの

春休み期間中で、中学・高校と経験したことのないサッカーに手を出した動機は、

「麻雀技術の上達」でした。というのも、大学１年次の春から夏にかけ。学生運動の煽りを受けて大学がロックアウト。構内への立ち入りも禁止でした。その期間中に麻雀というゲームを知ってしまったのが出発点です。当時は携帯電話・パソコン・インターネットなど存在せず、ロックアウトが解除されて授業が再開される時期を知るには、ほぼ毎日大学へ通う以外に



情報取得の手段がなかったのです。自宅のある横浜市から片道２時間かけて通うのも、苦にはなりませんでした。

そのうち雀荘に行けばクラス仲間に会えることを知って自分も雀卓に加わって遊ぶようになり、ロックアウト後も麻雀に熱中していきました。その麻雀グループの中にサッカー部員のクラス仲間がいて、

「サッカー部なら毎日のように場が立つから、入部したら？」と誘われ、ついその気になってしまったというわけです。

ただ、部活動をして、麻雀をして、さらに２時間かけて横浜に帰るのが面倒くさいと感じるようになりました。そこで下宿生活をしているサッカー部仲間に泊めてくれるよう頼んだところ、快諾（？）を得て、私のヤドカリ（宿借）生活が始まったのです。２年次には主に同期の古市くんや大島くんの下宿先に、３年次には同じく同期の宮くんや吉岡くんの下宿先にお世話になりました。ただ、今とは違って１階に大家さん一家が住んでいて２階の空いている部屋に下宿という形なので、常に大家さんの存在を意識せざるを得ませんでした。



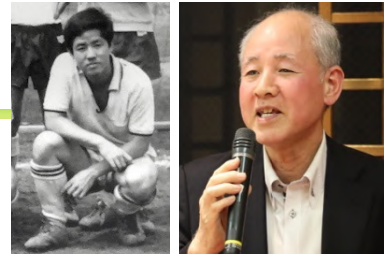


3年次までは地元で家庭教師をしていた関係で、平均週2～3回ぐらいのヤドカリ生活でしたが、4年次では、就職活動及び卒論準備等を考慮して家庭教師をやめたので、平均週4～5日ぐらいのヤドカリ生活が可能となってしまいました。そんな状況下で、私の前に救世主が現れました。2学年後輩の谷口くんです。しかも、大家さんの影が一切感じられない、今風の完全に独立したアパートでした。そして彼の部屋で、私は普通の大学生には考えられない体験をすることになります。

それは400字詰め原稿用紙で200枚を越す大作(?)の卒業論文を、このヤドカリ生活で書き上げたのです。しかも机は全く使用せず、部屋に敷いた万年床の中で、腹ばいで、全ページを書き上げました。私にとって、もう一度同じことをしろと言われても絶対できない芸当で、大学生活の中で貴重な体験となりました。本当に谷口くんには感謝感謝です。ちなみに谷口くんは、私が社会人となって2年後に同じ会社に就職したので、以降40年の付き合いが続いています。

ヤドカシ追記 ①

大島 正 (昭49卒)



文中にある「古市くんや大島くんの下宿先」とありますが、私たちの下宿は、学園東町の一般民家の2階2部屋。階段をあがってすぐが私の部屋、奥が古市くんの部屋でした。グラウンドから一橋学園駅までの距離と、駅から下宿までは同じくらいだったため「ヤドカリ先」としては絶好のロケーションだったと思います。賄い付きではなかったですが、洗濯は大家さんの奥さんがやってくれるため、助かりました。

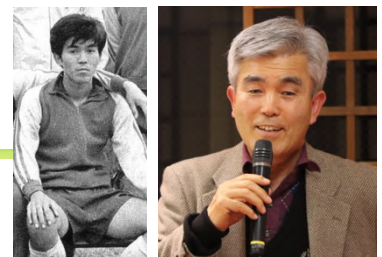
部屋は洋間で、広さは6畳程度。家賃は月6000円（当時は1畳千円というのが相場）だったと記憶しています。ただし玄関とトイレは大家さん一家と共用でした。トイレは洋式でしたが、杉山くんが古市くんの部屋の同居人になってからは、大家さんの娘さんが

「便座のカバーが濡れている」と時々叫んでいたことを、なぜか鮮明に覚えています。大家さんの奥さんが杉山くんに「あなたに部屋は貸していません」と詰め寄ったこともありました。いずれにせよ当時の下宿は大家さんと同居のため、それなりの苦勞がありました。

次に麻雀の話ですが、個人的に一番覚えている麻雀店は一橋学園駅の北口にあった店で、店主が、原書（たぶんロシア語）を読んでいるという、アカデミックさを持っていました。このアカデミックさに気後れしたのか、個人的な麻雀の勝ち負けの結果は、負け越しでした。一方、杉山くんは、たまに負けることはあっても、常勝組でした。将棋の棋譜のように、私が負けた様を克明に再現できる、集中力と記憶力はすごかったの一言です。

ヤドカシ追記 ②

古市 正興 (昭49卒)



大島くんが寄稿するなら小生も参戦せざるを得ませんね。

記憶が曖昧だったので、大家さんが苦情を言っていたとは今まで知りませんでした。

私たちは同じ下宿に4年間もいましたが、これはやはりサッカーをするのに便利だったことが大きいと思います。部屋のベッドは箆笥の上のような段にあり、杉山くんが泊まるときは上下で寝ていました。時々部屋でラーメンを作って食べたり、大島くんの部屋で駄弁ったりしていました。

またマージャンで覚えているのは、緒方くんや宮くんの下宿でよくやったことです。そこにサッカー部ではない植村さんという人がいて、大きな手で上がると彼は癲癇持ちなので痙攣し、しばらくそっとしておく、起き上がって再開するのです。

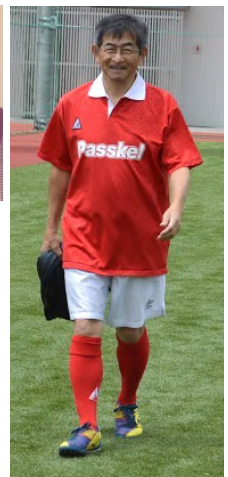
また駅の北口の雀荘での思い出は、先輩の矢野さん（建設省に入省された）が「天和」逃しの「地和」を上がったことです。1順目で1ピンが当たりだったのを矢野さんが見逃してしまい、がっかりしたのですが、自分の最初のツモで1ピンを引き飛び上がりました。まさに奇跡がおこったような瞬間でした。

大学後期になり、国立での授業になっても、バスで小平に帰りサッカー漬けの毎日だったことを懐かしく思い出します。サッカーはうまくはなかったですが、私の大切な宝物になっています。また大島くんとは名古屋在住ということで一生の友達であり妙な縁を感じています。



ヤドカシ追記 ③

谷口 伸一 （昭51卒）



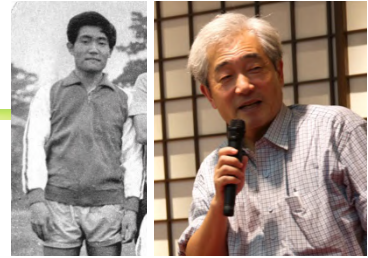
杉山さんは、私の部屋に泊まった翌朝、寝坊したため仮病を使って住商を休み、三菱商事の会社訪問に出ようとした私を押し止め、麻雀のメンツを組ませ、私の就職活動を邪魔しました。あの方が、あの日、私の部屋に泊まらなければ、私は今頃三菱商事の重役だったでしょう。





思い出ボロボロ

吉岡 基夫 （昭 49 卒）



大学に入学してから、即ちサッカー部の同期の皆さんとお付き合いが始まってから今年で 48 年になります。サッカーと一緒にしたのはわずか 4 年間でしたが、卒業後も尊敬する先輩方や頼りになる後輩の皆さん、兄弟の様に信頼ができる同期の皆さんと親しくお付き合いできることは私の誇りであり最も喜びとするところです。学生の頃はこのような長いお付き合いになることを認識していませんでしたが、今ではサッカー部に入って本当に良かったと思っています。「勉強しなさい」と、私を小さい時からスパルタ式に仕込んでくれた母が、なぜ良い大学に進学するように強く勧めてくれたのかを漸く理解し、改めて母に感謝しています。

【下宿】

サッカー部の皆さんは自宅から通っている人よりも、下宿している人の方が多かったと思います。私は最初小平寮に入り、4 ヶ月後に洗濯屋の 2 階に引っ越しました。学生運動が盛んな時でしたので、活動家が多勢寮の部屋に来て連日深夜に及ぶ議論をしましたので継続できませんでした。引っ越した先はクリーニング屋の 2 階でした。落研の同学年の人の隣の部屋でしたが、もう 1 人は 1 年上の植村先輩でした。大変な秀才で、マルクスの資本論を毎日 30 ページ読み、読み終わるとどこに何を書いてあるか全て頭に入っている方でした。サッカー部の皆様も僕の下宿に来た際に会われた方も多いと思います。

3 年生になって武蔵小金井に引っ越しました。宮内先輩が借りていた須藤荘の部屋に居抜きで移ることができ色々な生活用品を引き継がせてもらえて感謝しています。隣の部屋に宮くんが引っ越して来て居心地の良い下宿になりました。僕の下宿では置きコタツと電気ストーブで寒い冬を耐えていましたが、大島くんと古市くんの下宿は、羨ましいことにガスストーブで暖房されており真冬でも汗ばむ程でした。ほとんどの人が寒い中で卒論を書いたり、学年末試験の為の勉強をされていたと思います。

ある日の深夜、窓に小石が当たったので起きて外を見ると後輩の大久保くんたちが「吉岡さん、来ちゃった」と押しかけてきて、朝まで麻雀をした事もありました。牌を混ぜる時に音が出るので、毛布を敷いてひそひそ声で麻雀をやりました。皆さんの下宿を訪ねたわけではありませんが、似た様なものだったと思います。

この頃、宮くんの肖像画を油絵で描いてサッカー部の部室に飾りました。関東 2 部に昇格した時のグラマネの肖像と後輩の皆さまに崇めて頂いているだろうと思っていましたが、絵が稚拙すぎて、すぐに捨てられてしまったようです。



宮内



大久保

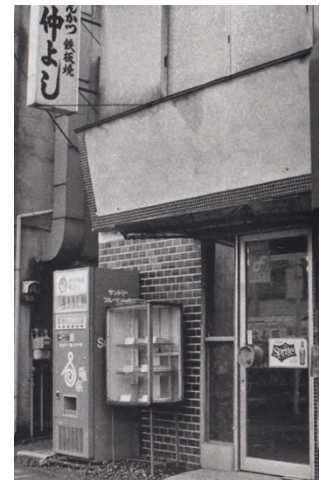


宮

【食と麻雀】

サッカーの練習が終わると、校門の近くにあるヤマザキパンで牛乳とパンを食べました。運動をした後すぐには食事が出来ないからという理由で一橋学園駅の近くの雀荘に行き、食前の麻雀をするのが日課でした。緑一色の役満を張っていた人がリーチだけの手で蹴られ、暫く口をきかなくなったり、振り込んでしまった牌をお茶の中に入れ「拾え」と命じた先輩がいらしゃったり、麻雀に関わるエピソードは沢山あります。高垣君に依頼した結婚式のスピーチで、僕の追いかけるリーチが「間スッピン」だったとバラされてしまいました。麻雀は楽しかったですが、時間を浪費したという意味で勿体無かったと思います。

麻雀をしているとお腹がだんだん空いて来るので、8時頃にはやめて夕食を食べに行きました。先ず「藤乃木」豚肉の生姜焼きでご飯を3杯食べ、次に「小くに」のトンカツ定食でドンブリ飯を1杯、最後に「なかよし」のスタミナ鉄板焼を食べてから帰宅しました。この後、まだパンとバナナを食べながら家に帰る人もいました。朝食はパンとコーヒー、昼食は学食で定食を食べていました。合宿時の食事は、少ないおかずが終わればご飯にゴマ塩を振って食べたりしました。体作りには最適とは言えないものだったと思います。栄養の摂り方とか筋トレの知識なども勉強していたら、もっと合理的に体を鍛える事ができたのと思います。



【合宿】

合宿といえば夕食後にロビーに行くと、バイオリンやピアノ等の楽器が置いてありましたが、皆さんが楽器を手にして合奏を始めたのには驚きました。子供の頃から情操教育に力を入れて育てられ、勉強とスポーツができるだけでなく高質な趣味を持っておられるメンバーが、沢山いたのは素晴らしいことだと思います。私は楽器に触らず、宴会の時にはピンポンパン体操ばかりやっていたけれど、実は子供の時からバイオリンをやっていて音感には自信があった能ある鷹が爪を隠していた大久保くんのような人が、他にもおられるのではないかと思います。

【バイト】

皆さんは色々なバイトをされていましたが、僕は家庭教師のバイトをしていました。家庭教師先で洗濯をしてもらえたので助かりました。他のバイトは経験がありませんが、一度親から送ってきた授業料をすき焼きをして食べてしまったので、静岡競輪場のガードマンのアルバイトを3日やって稼いだことがあります。1日の売り上げを銀行の金庫の中まで運搬する作業もしましたが、2億円をジュラルミンの箱に入れたら、1人ではとても持てないことを学びました。何事も経験で無駄になることなどありません。

【コンパ】

学生時代を振り返る時、コンパのことは外せません。

社会人になってからも大勢いる宴会は沢山経験しましたが、サッカー部のコンパ以上に楽しい宴会はありませんでした。新入生歓迎コンパは毎年西荻窪「松寿司」で行なっていました。酔っ払った先輩が2階の窓から座布団を回転させながら外に投げたり、猥歌や流行歌の替え歌、外国語の猥歌、先輩から引き継がれている宮本武蔵が雨に降られて難渋する落ちの面白い話など初めて聞いた時も、何度も聞いて知っていても、いつも大盛り上がりでした。

普段はお酒を飲む機会はなく、新入生歓迎コンパ、リーグ戦終了時の納会、4年生送別の追い出しコンパぐらいでした。僕が3年生になってから女子マネが参加されましたが、女性の存在に忖度することなくコンパの出し物に大きな変化はありませんでした。困惑されて机に突っ伏して笑っておられました。

【女子マネ】

女子マネの初代の方々は、ラグビー部が津田塾大学に「女子マネージャー求む」と張り紙をしたところ、サッカーとラグビーを間違えてグラウンドに来られた方たちでした。「誰のお母さんだ」と言っている人や、張り切ってヘディングシュートをしたところ脳天に当たってしまい、女子マネの前で何を言っているのか分からなくなった人もいました。初代女子マネの猿渡さんや河野さんと是非お会いして、楽しかった思い出などお話ししたいものです。



学生の時に親しかった人とは何年経っても親しく、愉快にお付き合いできます。これからも西松会の皆様にお会いするのを楽しみにしております。

とにかく明るい貧乏生活

大山 航輝（平 26 卒）



サッカー部内ではプレイヤーとしての私の名はほとんど知られていないと思いますが、その分応援団として4年間、小平グラウンドにて大きな美声を轟かせていました。大学時代は麻雀漬けの生活がたり留年したため、大学は2015年に卒業しております。社会人になって早3年、同期の婚約・結婚ラッシュが続き、毎日サッカー、麻雀、あるいはビリヤードをしていた学生時代が遠い昔のように感じています。振り返ってみると・・・

●貧乏暮らし

国立で家賃41000円の風呂なし6畳アパートに住んでいました。

部屋は2階でしたが、階段を上るとアパート中が揺れるため、誰かが来たことが分かる便利な仕組みでした。窓やドアの立てつけも悪く、風が強い日は家じゅうに風が入り込み、窓や扉がガタガタと鳴り続ける家でした。また自分が住んでいた時、仲良くご近所付き合いさせて頂いた騒音おばちゃんが1階におり、年がら年中音の絶えない愉快的な家でした。社会人になった現在、会社の補助で、それなりに良い家に住ませてもらっています。学生時代からのギャップで家が快適に感じられ、普通レベルの生活が送れることへの感謝に満ち溢れている今日この頃です。

結論：学生時代は貧乏暮らしをしましょう！

●麻雀

大学2年の時に麻雀に出会いました。

5つ上の先輩から雀卓を譲り受け、サッカー部卒業時に3つ下の後輩に譲りました。

ア式蹴球部に脈々と伝わる麻雀魂が今も受け継がれていると思うと感慨深い気持ちになります。後輩たちにはこれからも伝統の雀卓を使い続けてもらいたいものです。今でも会社の先輩とよく麻雀を打ちますが、麻雀は長時間にわたり同じ空気を共有するため、手っ取り早く相手と仲良くなれるツールだと思います。大学で鍛えた麻雀力をいかんなく発揮し、会社の先輩との麻雀では無双しております。先月は3万円負け、今月は2万円負けです。

結論：麻雀仲間募集中です！

●三商大戦

個人的に今でも強烈に残っている思い出は、4年次に、神戸大学・大阪市立大学を圧倒した

「モザイク刑事（デカ）」事件です。私の3つ上の先輩に金魚の丸呑み、クワガタの幼虫のバリバリ食いなど、破天荒な芸の持ち主がいっぱいいました。そうしたこともあって一橋は他大学とは異なり、少人数が長めの尺で一発芸を披露しておりました。これまでは関西の笑いのツボを押さえられず惨敗続きでしたが、「パイパン刑事（デカ）」は一部マネージャーを除く他大学のプレイヤーを巻き込んだ一体感のある笑いをかっさらい、我ながら良い一発芸でした。

ただ全身の毛を反り、局部を黒マーカーで塗りたくり、
全裸で縄跳びし、コンドームを全マネージャーに渡すという、何のひねりもない芸でしたが、
若さと勢いだけで勝負した印象深い一発芸です。社会人になると、なかなかあのような芸が
できないことに一抹の寂しさを感じております。

結論：とにかく明るい安村とアキラ 100%にはシンパシーを感じる。

以上、学生生活を振り返ってみましたが、改めてバカで楽しかった思い出ばかりです。
今も学生時代と変わらずバカなことばかりしていますが、年をとっても変わらずにいたいと
思っております。くだらない長文にお付き合い頂き、ありがとうございました！



2012 年 同期と沖縄旅行



2015 年 屋久島にて



2018 年 同期と黒川温泉旅行

🏆 マイ食ライフ

関澤 勇人（3年）



OB・OGの皆様方、現役の活動に対する日頃の御支援、まことにありがとうございます。テーマが「私の学生ライフ」ということで「ライフ=食」という考えがパッと頭に浮かんだため、日々部員が練習後に訪れるお店を紹介させていただきたいと思います。

①小平編：いまだに土のホームグラウンドがある我等が小平。

うどん屋 武

その名の通りうどんのお店です。「カルボナーラうどん」等、創作うどんをメインとしていてとても美味しいです。食後のデザートは杏仁豆腐やコーヒーゼリーが、これまた美味です。



藤乃木

言わずと知れたとんかつ屋さんです。現役部員は「串カツ定食」と「生姜焼き定食」のどちらかを頼むことが主です。たくあんがこれまた美味です。



昭和40年代



満福楼

新小平駅を出てすぐにある中華です。看板に偽りなしとは、まさにこのお店のことで、米が特盛で出てくるので満腹幸福万々歳です。



②府中本町編：人工芝のグラウンドを府中本町駅の近くで借りているため、しばしば訪れます。

厨（くりや）

うどんのお店です。うどん屋武とは違い、麺のシコシコ具合が激しいです。鶏天がとても美味しく、このお店に勝る「鶏天ぶっかけうどん」は、東京にはなかなかないでしょう。お店の人がとても優しく、練習後ということで疲労回復のオレンジをサービスしてくれます。さらには試合観戦に来ていただいたこともあり、感謝が止まりません。



③国立編：練習後、国立まで自転車を飛ばし、昼ご飯を食べることは少なくないです。

いたりあ小僧

結構、古めのパスタ店です。追加パスタを頼むと以外に値が張るため、いつも一番安い「にんにくオリオ」に、追加パスタを1人前か2人前頼みます。部員に人気なのは「しょうゆtrenchieノ」「トマトいか」「なっとう」あたりです。



いなみ

焼肉屋さんです。ランチでは 1000 円弱のクッパやビビンバが人気です。
私は辛いのがあまり得意ではないので、「コムタンクッパ」をいつも食べます。
お金があるときは「カルビ定食」に手が伸びかかりますが、自制しています。



ロージナ茶房

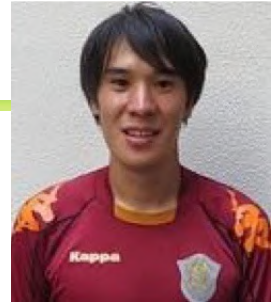
結構、昔からあるお店っぽいので、よく行かれていた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。
「タコスライス」や「ザイカレー」が定番ですが、グラタンやパスタなど、色々揃っています。
食後のフルーツゼリーが美味しいです。



いかがでしたでしょうか。これをきっかけに、よく通ったお店などを思い出し
郷愁に浸り、良い気分になっていただけたら幸いです。

バイトと合コンの日々

森山 裕里 (2年)



私は大学まで約2時間かかる神奈川県鎌倉市に住んでいます。

自然豊かで寺社も多く住んでいてとても気持ちの良い街です。

練習は基本的に朝練なので、朝の4時台の始発に乗ることもよくあります。ですから周りの部員の人たちには絶対に下宿した方がいいと、いつも言われています。しかし、私が下宿をせずに鎌倉に拘る理由がいくつかあります。

まず1つ目の理由として、私は地元の塾でアルバイトをしています。そこには男子講師の倍以上の女性講師がおり、美人な人が多いです。大学でア式以外の友人が皆無である私には、通常なら面倒くさいと思われがちなアルバイトが生きがいであり、週2回の自分へのご褒美だと思っています。また、私は中高時代男子校であったために、子高生と話す機会が無かったので、失われた6年間を取り戻すため、授業をほったらかしにして生徒とお喋りをします。ここまでだと私はただの怪しい人だと思われそうですが、基本的にはしっかりと授業をしていて、いつも塾長に褒められています。しかし散々アルバイトが楽しいと言ってきましたが、最近、塾の女性講師の多くが彼氏がいると聞いてショックを受けており、バイトへのモチベーションが無くなってしまいました。そこで心機一転、合コンに行くようになった私ですが、行った合コンはどれも宴会のようになってしまい出会いの場として機能していないものだったので、当分は行かないようにしようと決心しました。

下宿をしない2つ目の理由を述べようと思ったのですが、何も思いつかないです。

よく考えてみたら終電も早く、観光客で人がごった返しており、私にはとても不便な街だとうやく気がつきました。アルバイトが楽しくなくなった今、こんなに苦しい思いをして鎌倉に住み、2時間かけて大学する理由も無くなったので、両親と相談し一人暮らしを考えたいと思います。

*昨年の夏

新宿で行われた合コン
カップル成功率 0%



🏈 バイト、合コン、そしてサッカー

渡邊 友彬（2年）



こないだ大学に入学したばかりなのに、もう大学生活の半分が終わろうとしています。そこで、わずか2年間ですが、自分の学生ライフを紹介したいと思います。

ア式蹴球部に所属している以上、サッカー中心の生活をしていますが、その他にやってることと言えばバイトや合コンなどがあります。バイトは塾講師をやっている自分が小4から中3まで通っていた地元の塾で働いています。その塾は、正規の先生は3人だけなのに小4から高3までの全学年を全教科教えているという、とんでもない塾です。研修もなしにバイトとして行った初日にいきなり高2英語の集団授業をやらされ、次の日には授業の開始時間を間違えて遅刻したりなど、なかなかのスタートでしたが、空き時間は給料なし、1日の労働時間は2コマ分で1時間40分だけ、週4連勤という過酷な労働環境に耐え2年間働いてきました。しかし、つい1週間ほど前に塾が潰れることを聞き、突然リストラ。やはりとんでもない塾でした。来月からメインのバイトが無くなります。

こんな感じでバイトは忙しいのですが、水曜と日曜の夜は基本的に空けます。翌日に部活がないため、合コンに行ったりデートしたりとなんでもできるからです。ア式では僕の代では割と合コンを開催していて、数えきれないくらい行っている人もいますが、僕自身は2回だけです。経験として行ってみてわかったことは、僕がB専だということです（個人的には守備範囲が広いだけだと思っていますが……笑）。誰が可愛いかという話になると、結構本気で選んでいるのですが、毎回僕だけ他のア式の人が選ぶ子とは別の子を選びます。結果、倍率が低くなり2人で遊びに行ったりできるというメリットがあるので、B専にはそれなりに感謝しています。

さて部活では、去年の関西遠征が印象に残っています。

関西遠征期間中は怪我をしていたため試合等はできなかったのですが、同行して観戦はしていました。そして事件は遠征初日に起こりました。試合が夜からということで昼飯を食べてから現地に入り初日の試合に臨んだのですが、終わったのがだいぶ遅くなってしまいました。急いで宿に戻ろうとしたのですが、最寄りの羽衣駅が僻地的な場所でアクセスが悪く、さらに電車内で皆居眠りをしてしまって乗り過ごし、戻ろうと別の電車に乗ったら急行で羽衣駅を通り過ぎるなど不幸が重なり、駅に着いたのが23時過ぎになってしまいました。宿の方に閉める時間をだいぶ延ばしてもらっていたこともあり、レストランに入ることもコンビニに寄ることもできず、夜飯を食べずに宿に戻りました。

大学でア式蹴球部に入ってから、食事ラインで毎日3食の食事管理をされていますが、夜飯を食べられなかったのは後にも先にもこの1回だけです。まさか遠征中に食事の基本的なルールを破るとは思っておらず、印象的な出来事でした。翌日の朝ごはんをめちゃくちゃ食べたのを覚えています。

以上、バイト先が潰れるとか、B専認定されたとか、飯食べられなかったとか、高校時代に思い描いていた大学生活とは少し違う生活を現在送っています。



新宿で上智大と行われた合コン カップル成功率 0%



3つのアルバイト

達 康大 (1年)



今現在、私はアルバイトを3つやっています。
大手予備校のチューター、補習塾の塾講師、寿司屋の3つです。

大学生になって最初に始めたアルバイトが大手予備校のチューターです。
とりあえずアルバイトを始めてみようという軽い気持ちで始めましたが、仕事が多く、
自分が受験生の時に考えていたよりもずっと大変なアルバイトでした。ただ、他大学の方々と
繋がりを持つことができる貴重な機会ではあったので、始めて良かったと今では思います。
同じ曜日のチューターに女子が少なかったのが少し残念ですが… (笑)。

次に7月末に始めたアルバイトが補習塾の塾講師です。
チューターのアルバイトだけでは貯蓄にまでお金が回らず、それどころか赤字状態だったので、
時給が高くて効率良く稼げるアルバイトを、と思って始めました。チューターと比べると
仕事が楽で、なおかつ時給が倍近いということで、条件的には3つの中で一番良いです。
どのくらい楽かということアルバイト中にずっと携帯をいじっています (笑)。
しかし、それほどシフトを入れられず、収入的にはチューターとほとんど一緒に、
依然として貯蓄にまでお金が回っていませんでした。

そこで、8月に始めたのが寿司屋のアルバイトです。
塾講師と比べると時給は安く、ラストまで入るとアルバイトが終わるのが
23時半になってしまうので、次の日の部活が朝早いと体力的には厳しいですが、
チューターや塾講師と違って飲食店で働くということで、人間として必要なことを学べている
気がします。条件的には塾講師よりは良くないですが、一度に6時間以上は入れるので、
3つの中では一番稼げます。

3つのアルバイトについて書いてきましたが、
土日アルバイトをすることが難しい環境の中で3つもしていると、平日はかなり忙しく
なってしまっていますが、自分としては充実した日々を送ることができていると感じています。
これからも部活とアルバイトを上手く両立させて頑張っていきます。



＊昨年8月末 1年同期でソサイチ（7人制フットサル）に参加＊



＊昨年6月末 1年同期で箱根に学年旅行＊

⚽ 西松会新聞は必要か？

福本 浩（昭 52 卒 編集長）



今回もたくさんの方々に寄稿いただいたことに感謝。

現役の4年生たちが無念の1年を振り返り、今の気持ちを書いてくれた

ことに、感謝。今まで寄稿が少なかった平成卒 OB への声かけに尽力してくださった

大石さん（平 5 卒）に感謝。初めて現役の1～3年生たちも書いてくれ、感謝。おかげ様で、これまで以上に幅広い年代層の原稿が集まり、編集長としては、ただただ感謝、感謝。しかし、だからこそ思う。西松会新聞は何のために存在するのか・・・、今後、どうあるべきか・・・と。

平成 20 年（2008）に創刊された西松会新聞。

当初は紙媒体として郵送され、少なくとも配った数だけは読まれているという実感はあったらと思う。しかし平成 26 年（2014）以降デジタル化されネット上での公開になり、対費用効果としてはよかったのだが、新聞が読まれているかどうか、わからなくなってしまった。そこに私の悩みがある。このまま続ける意味があるのか、マンネリになる前にそろそろやめ時か、それとも違う形を考えるかと、迷いながら集まった原稿を読んでいた。すると、現役4年生の藤原くんの記事に、こんなことが書かれていた。

おととしの関西遠征でのことでした。縁もゆかりもないように感じていた関西での試合で、かなり先輩の OB の方が数人観に来てくださり、「普段はネットとか西松会新聞でしか情報が入ってこない。だから3年に1度、一橋が関西に来て試合をするのを楽しみにしている」と話してくれました。何年たっても、遠く離れていても、自分たちの活動と夢を応援してくれる人たちがいることを強く実感できた出来事でした。

私も藤原くん同様、勇気づけられた。目に見える反応はないが、確かに誰かには届いていると。いつでも、どこでも読むことができる状態で、ネットに存在し続けることに意味はあるのかもしれない。40～50 歳も年齢が違う者が、同じ紙面に同じテーマで寄稿する場合は、そうはない。少なくとも私は楽しんでいるし、毎回、発見がある。近々、寄稿してくれた同業の若手 OB と一緒に酒を飲むことになった。こんな交流が広がってくればいいなと思う。ただ、寄稿者を募るのが毎回大変で、この点については幹事の方々と話し合う必要がある。

というわけで、OB 並びに現役の皆さんにお願いがあります。

西松会新聞の今後を考えるにあたり、ぜひ新聞を読んだ皆さんのご感想、ご意見、ご希望を下記のメールアドレスへお送りください。よろしくお願いいたします。

Fukug1954@db4.so-net.ne.jp